常照

58
2009

佛教大学図書館報

佛教大学図書館所蔵

目次

・初版、増補版、改訂版……山﨑高哉……1
・井川定慶師寄贈『紀念継志會記録』……三輪晴雄……3
・平成二十年度図書館関連委員会委員名簿……7
・新収資料紹介『いはや』……古川千佳……(1)

「黒谷金戒光明寺」

色刷木版画『都名所百景』の一。絵師は玉園、版元は石和。山門をくぐったところから石段を見上げる雪景色の境内であるが、春は石段両側からの桜のトンネルを楽しむことができる。

金戒光明寺は、法然上人が比叡山黒谷での修行の後、下山されて最初に草庵を結ばれた地に建立された寺院で、上人が山頂の石の上で念仏を唱えられた時、紫雲がみなぎり、光明があたりを照らしたといわれることから山号・紫雲山、寺号・金戒光明寺と名づけられたという。浄土宗京都三本山の一つ。

初版、増補版、改訂版

―ケルシェンシュタイナー研究の落とし穴―

図書館長　山　﨑　高　哉

前号で、私は、学生時代以来ずっと研究対象にしている20世紀初頭ドイツの教育実践家・教育改革者にして教育理論家・教育学者でもあるケルシェンシュタイナー（Georg Kerschensteiner,1854-1932）が1905年に出版した『描画能力の発達―新しい研究に基づく新しい結果』の初版本を所蔵しており、これを日本では私しかもっていない「お宝本」と自慢にしてきたのが、NACSIS-Webcatで調べてもらうと、三つの大学附属図書館に所蔵されていることが判明し、「お宝本」としての価値が一挙に下落したことを書いた。それとの関連で、今回は私がケルシェンシュタイナー研究において多くの図書館のお蔭を蒙ったことについて述べてみたい。

ケルシェンシュタイナーは教育実践家・教育改革者から教育理論家・教育学者への仲間入りをした人物で、彼の著作の多くは、それに対する批判や異論が現れるたびに、また彼の立場や見解が変わるごとに改訂され、あるときは別の雑誌に掲載された論文が増補されたり、またあるときは新しい字句や術語によって内容に訂正が加えられたり、逆に一部削除されたりといった具合で、版を重ねるうちに次第に初版の原型を止めなくなるのである。したがって、彼の著作のこのような「特殊事情」を知らずに、その初版の出版年だけを頼りに彼の教育思想の展開過程を叙述すれば、とんでもない誤りを犯すことになりかねない。

故人を鞭打つことを控えるため、お名前は挙げないが、ある先輩研究者はケルシェンシュタイナーの教育思想の発展を、下表のように分けておられる。

- 初期（1899 ～ 1913年）
  - 前小期（1899 ～ 1901年）　実証主義的時期
  - 後小期（1901 ～ 1913年）
  - 前小期（1913 ～ 1917年）
  - 社会教育学的人格教育学的時期
- 中期（1913 ～ 1926年）
  - 後小期（1917 ～ 1926年）　文化教育学前期
- 後期（1926 ～ 1932年）……文化教育学的時期

先輩研究者はケルシェンシュタイナーの教育思想の発展を、このように厳密かつ詳細に３期に分かち、その上で、「ケルシェンシュタイナーの初期教育論に於ける公民教育、労作教育、性格教育の概念」について論じられた。しかし、先輩研究者が実際に論じられたのは「初期教育論」だけではなかったのである。

一例だけを挙げよう。ケルシェンシュタイナーの代表的著作『労作学校の概念』(Begriff der Arbeitsschule)は1912年に出版された。初版は本文73ページ、ミュンヘンにおける労作学校組織の実際について述べた付録を含め95ページの小著であった。しかし、1913年には増補され、143ページになった。1917年の第３版においては、労作学校に関する概念がより科学的に解明されるとともに、付録が86ページに拡大され、198ページになった。1920年の第４版と1922年の第５版では大きな内容変更はなかったが、1925年出版の第６版には、「労作の教育学的概念」という章が付け加えられた。それで、第６版は252ページとなった。その後、1928年の第７版は労作概念に関する若干の修正があっただけで、1930年の第８版も何の変更もなく出版された。ナチス時代にはケルシェンシュタイナーの著作は出版禁止となり、『労作学校の概念』の第９版が出版されたのは1950年であった。

ケルシェンシュタイナーの代表的著作『労作学校の概念』に限っても、このような増補・改訂を重ねているのであり、最初95ページであった本が、最終的には256ページにまで「発展」しているのである。他の主要著作においても事情はまったく同様である。

いささか遠回りをしたが、先輩研究者の論文「ケルシェンシュタイナーの初期教育論に於ける公民教育、労作教育、性格教育の概念」では、「労作教育」の概念において、すでに「教育的意味における労作」が問題になっている。もちろん、彼は「初期」においても、そのような意味の労作概念を知らないわけではなかったが、先輩研究者が引用されている労作概念は、上記1925年出版の第６版 第３章の「労作の教育学的概念」で論じられているものであり、先輩研究者の言う思想発展の時期に直せば、「中期」の「後小期」に相当するのである。ところが、何の吟味・検討もなされず、それがそのまま「初期」教育論における「労作」概念として取り扱われている。しかも、これは単なる一例にすぎない。

私がケルシェンシュタイナー研究に際して、これを「他山の石」として、彼の著作の成立事情に十分な配慮を払い、厳密な原典批判を行って、先輩研究者が陥った轍を二度と踏まないように心がけたのは言うまでもない。したがって、同じ著作でも、版ごとの比較研究をするため、それぞれの版を探すのに大層苦労した。例えば、Begriff der Arbeitsschuleは、京都大学の教育学部図書室には２版と７版、それに戦後版しかなく、当時は、残念ながら、NACSIS-Webcatはなかったので、ありそうな図書館の目星をつけて検索・閲覧を願い出た。初版を奈良女子大学附属図書館で見つけたときの喜びはたとえようもなかった。大きな増補・改訂が行われた第３版は、日本の図書館のどこにもなく、ドイツ留学時に見つけ、いまも大事に所蔵している。他のケルシェンシュタイナーの著作に関しても、同じような悲喜劇を繰り返し、ケルシェンシュタイナー研究をまとめたが、いまなお、お世話になった図書館に対する感謝の気持ちに衰えはない。

（教育学部教授・やまざき　たかや）

井川定慶師寄贈『紀念継志會記録』

三　輪　晴　雄

図書館浄土宗文献室が所蔵する資料は、明治以降の浄土宗教化資料を中心に構成されている。収集には多くの宗内外の協力者があった。いま検索可能になった『浄土教報』は、明治期の仏教界の事情を、浄土宗を中心に他宗派の動向を交えて報道する宗教機関紙で、本学の誇れる資料の一つである。しかし浄土宗文献室にはいまだ整理討究されていないものがある。担当者自身の能力不足を顧みず昨年本誌に報告したのもそのような視点からであった。

乾板写真『継志学寮時代』の一文は、知恩院継志学寮とはなにか、それはどこにあったのか、を調査したのである。これを浄土教報に依拠し述べた。職を去るにあたり責の一半を果たした、と考えていた。しかし時を置かずして図書課長藤堂祐亨さんから『紀念継志会記録』の一冊が提示された。井川定慶氏の寄贈だとのこと。図書館に所蔵されていたことの不明を恥じながら内容の検証を試みた。以下その報告である。

◉体　裁◉

和綴で青い表紙に白地貼題箋に『紀念継志會記録』（以下「記録」と記す）と記された縦228㎜×横160㎜の書冊である。中綴紙は、和紙様の藤色罫線と飾り匡郭の一紙二十行の罫紙が使用されている。これを中折りして綴じたもので手製かと思われる。全六十八丁で本文は二十丁で残りは白紙である。いまは帙に収められている。

◉構　成◉

第一丁表裏は、内題か、捨紙の意味合いであろうか、白紙である。第二丁から三丁表裏にかけて「紀念継志會幷ニ紀念継志学寮設立趣意書」の見出しを毛筆で記す。『浄土教報』（以下「教報」と記す）第九百四十五号　明治四十四年二月二十八日（七）上段以降の掲載文と同一である。ただし「記録」には、会則、寄付についての記述はない。第四丁表裏は白紙である。
第五丁表の書き出しは

継志学寮在宿

大正六年卒業	文学士	石神徳門
大正二年卒業	文学士	定　恵苗
大正三年卒業	文学士	山鼻聽瑞

で始まり、以下空白が続き第五丁裏十行目に「大正七年度記録」と毛筆書きで始まる。
「趣意書」とは別筆である。

大正七年度は一月二十六日、二月三日、二月二十三日、六月二十七日、十月十七日と十一月に日付のない記録があり,総計六件の会合記録である。会合の翌日に記録されおり、複数の人たちで書き継がれている。理事が記録したようで、文末に理事と署名をする。内容は具体性を欠くがその時々の活動は類推できる。役員、会則などという語句からである。

大正八年度記録（八丁表）は一月三十一日に始まり十二月六日まで九件の活動記録。寮生との遠足、講演会が中心である。とくに椎尾辨匡博士と京大石川日出鶴丸博士、仁保博士の鼎談は、浄土宗門、洛陽人士の耳目を惹いたようである（十丁表）。「教報」の報道か

ら明らかである。

大正九年度記録（第十一丁表）は、二月十八日の総会に始まり十一月一日の五件を記録。前年度を踏襲する活動状況である。注目すべきことは十月十八日新入生歓迎会で堀田(義成)、三枝樹（正道）の二人が理事を委嘱される。前の理事は堀田、杉野（享信？）である。理事は継志會会合の記録をしたことを考えると、第五丁に記されている三名はこの「記録」の最初の理事ではなかったかと思う。

大正十年度記録（第十三丁表）は、六月十一日と十一月十二日の二件である。六月は椎尾博士の入洛の機会を得ての講演会（この件については全く読めていない、文字が薄く判読すら困難である)。十一月は三高寮生伊藤演亮の急逝を悼む記事である。

大正十一年度記録（第十五丁表）は、二件である。記録件数は少ないが、内容は継志會、継志学寮を百万遍了蓮寺から知恩院に移す議が挙がり、以降実行へとすすめられた経緯が記されている。

大正十二年度の記録（第十六丁表）は、二月一日、三月十日、三月十二日、六月二十六日の四件の記録である。年度の前半に集中しているのは知恩院役宅への寮の移設が果たせたことによる。

大正十三年（第十九丁裏）二月七日、二月二十一日、三月十三日と十一月三十日の四件の記録である。二月、三月は開宗七百五十年遠忌記念に協賛した「開宗記念信仰相談会」などの活動記録である。十一月は継志会学寮に関わった吉見広勝の死去と百万遍での本葬に花環と弔辞を捧げたことの記述である。

大正十四年（第二十丁表）は、五月二十一日都ホテルで総会を開く、と出席者の名簿を挙げたのみ。余談であるが翻刻の過程で「預餞会」の語句に出会い「大学入学時」に出合ったことばで懐かしさを覚えた。いまではコンパという。

継志會、継志学寮の設立（移設）

－「紀念」から「知恩院」－

大正七年から書き起こされて大正十四年に終わる「記録」は、大正十一年に継志會、継志学寮を再構築しようとする記録に注目しなければならない。しかし、記録者が多人数にわたり、筆勢に巧拙があり、さらに文字の濃淡が著しく、翻刻に時間を要した。十分ではないが理解できた範囲でここの責を果たしたい。

【翻刻】

大正拾壱年年度記事

十月三十日
知恩院特別宝物(二字不明)。来会の者二十数名別に東亜美術院研究会会員多数。講師澤村助教授其他知恩院の幹部数名土川師石川博士。
会後知恩院より特別に昼飲と茶菓を受け尚今後継志会が社会へ対する方面、宗教界へ対する発展等の懇談会を開き色々好都合なる話となる継志会の前途を期して待つべきものありき其の条件の一、二をあくれば

一、毎月一回位の座談会を開く
二、春秋二期に公開の講演会を催す
三、寮の問題
四、基本金問題
五、其他

大正十一年十二月二日夜信重院に於いて
本会総会を開く
会者　伊藤祐晃　吉見広勝
　　塚本善隆　小林義道
　　川瀬光順　定　恵苗
　　前田聴瑞　大島徹水

江藤澂英　　藤堂祐範
決議事項
知恩院山内に於て本会寄宿舎経
営之事

右経営方法
一、役院を以て寄宿舎に充つる事
二、本山より右に必要なる経営費の支
　出を仰ぐ事
右実行委員を左の四氏に委託す
る事
前田聴瑞君　　川瀬光順君
富森大梁君　　藤堂祐範君

継志会の社会貢献と将来方針の五項目をたて、それを実行すべく、まず知恩院山内の役宅に継志学寮を（了蓮寺から）移し、知恩院の援助を仰ごうとすることである。前号「常照」においてこのあたりが釈然としないと指摘した。ここで了蓮寺から知恩院役宅に移す端緒が明らかにされた。了蓮寺からは京大、三高へは至近距離であるが、寮の狭さ（拡張が困難であった）と老朽化のため発展を望めない。もともと継志会、継志学寮の設立趣旨は、寺門後継者、檀信徒の子弟が京都の官公立、私学に通学するのを援助し、そのなかで宗教情操を高めることを目的とした有志組織である。このことは前号の『常照』にしるした。明治44年以降次第に収容者が増えて施設設備に問題が生じてきたと考えられる。

ここに名を連ねる人物は、京都の宗門教育界、学会を牽引した人たちである。知恩院はこの要請によく応えたことになる。

大正十二年二月一日の記録は、信重院での継志会新年例会と予餞会に合わせての継志学寮設立実行員会の開催を伝える。このときの参加者の名簿は以下の通りである。

【翻刻】

実行委員　前田　川瀬　富森　藤堂
欠勝　義孝　高畠寛我　欠菅原菅雄　欠□堂
義正　出須賀隆賢　出入中村徹恩
欠定　恵苗　欠小林義道　小林瑞淨　本庄良
教　常済□□　水野隆樹
欠富森大梁　入出杉野□□　出入大島徹水
欠前田聴瑞　出入郁芳随円　出入藤堂祐範
欠伊藤祐晃　入出江藤澂英　入出高田實隆
入出片岡□□　北川全龍　入出□□□□　欠
吉水順孝
入出井川定慶　伊藤典孝　入出塚本善隆　欠
神谷清久　服部行雄　欠珠山順哲　欠川端隆
巌
梶原隆徳　欠才田正則　入出三枝樹正道　入
出　佐藤秀堂　入出堀　　入出吉見広勝
出席者　特別会員　八名　弐拾四円
正会員　　八名　　拾六円
計四拾円

＊□は解読不能

これは知恩院継志会設立に関わった人の総名簿と考えてよいであろう。小文字の入出欠は会費納入と出欠席の確認印と認められる。□は読めない字である。案内状を出した人たちの当日の状況を記録したのであろう。佛教専門学校教授、華頂、家政、東山、上宮の校長、教頭、教員と京大、三高生の名が見える。このなかの幾人かは本学に子孫や縁者としておられる。何か書きつけでも残っておればご教示いただきたい。名列末には出席者人数と会費報告がある。

【翻刻】

五月下旬華頂山内役院に華頂継志学寮の門
標を掲げ第三高等学校生井上順孝入
寮す

と、大正十二年五月末日知恩院に華頂継志学寮の設立体裁が整ったのである。設立への意気込みから見るとあまりにもそっけない記述である。お祭りの終わったあとのよう虚脱感の雰囲気が漂っているようである。

◉まとめ◉

『紀念継志会記録』は、百万遍了蓮寺中に有志で設立された紀念継志会と学寮を、祖山知恩院内に移し、祖山を母体とした育英事業として位置づけた記録である。時間の流れから見れば「移設」であるが、組織の観点からは「設立」と呼べるかもしれない。『知恩院史』においてその前史が述べられないのはここらかもしれない。知恩院が役宅を当てたのは、知恩院の育英事業として取り組み、「開宗記念事業（七百五十年）」の一環として進めたのではなかろうか。

◉追　記◉

この「記録」は、継志会、継志学寮が有志の活動から組織団体の育英事業に代わる経緯の記録である。それゆえ目的を達したか、ここで記録は終わりとなる。「教報」第千三百九十二号大正十二年十二月十九日(十三)上段に「醒めたる継志會と眠れる興学舎」と題し、

京都帝大三高を中心とせる本宗信仰団たる継志會は創立以来既に十数年の歴史を有し･･･時勢の推運は自然同會の興起を促し･･･最近浄宗信仰の熱誠家仁保石川両博士の如き同会に関係するに至り･･･その将来は注目に値すべき･･･京都における継志會と略同性質を有する･･･東京に興学舎あり･･･継志會よりも古き歴史を有し･･･浄宗に関係ある各大学生を収容しつつ･･･有力なる人材養成･･･近は著しく衰微を来し下宿営業と殆ど異ならざる状態･･･

継志会は、興学舎の驥尾に付して起こったにも関わらず、いまやその活動は目を見張る。興学舎は単なる下宿屋に堕したと慨嘆してみせる「教報」である。余ほど腹にすえかねたるものがあったのであろう。しかし有志による興学舎運営は、当時澎湃としておこる慈善事業の組織化に立ち向かうことは不可能であり、継志会が有志運営から組織運営へと脱皮しようとする意趣とは自ずから勢いは異なるであろう。「教報」が興学舎の低調を嘆くのも一理ある。「教報」の草創期において、陰に興学舎の支援があったことを知らなければならない。社屋は当初興学舎に置いていたと思われる。また宗門の機関紙の地位を得るまで興学舎が出版していた書籍の頒布権をもらい、次に版権までも譲りうけることで経営基盤を固めていった。「教報」の記事を斟酌すれば興学舎を単に貶めている記事とは認めがたいのである。興学舎を報ずる記事は継志会よりはるかに多いことを知るべきである。

ところで継志会と興学舎の双方に共通する人のあったことを紹介しよう。

大正四年早稲田大学英文科を卒業した須賀隆賢である。氏は、興学舎に寄宿し卒業後しばらく「教報」紙上で筆をふるっていた。のちに帰京し佛専時代と新制佛教大学で教壇にたった。帰京後に継志會設立に関わったのであろう。このことから須賀隆賢氏は興学舎と継志會を知る人物である。このとき帝大英文科で同宿であった、矢代幸雄はのちに日本美術史、美術評論家として名を馳せ、初代大和文華館館長を務めた人物である。矢代はこの寄宿で仏教の素養を身につけたか、興味あるところである。

乾板写真『継志学寮時代』と記された箱書きに導かれてここまで深入りした。ここへ誘われ資料提供を教示された藤堂課長に御礼申し上げます。また書くように促された図書館専門員古川千佳さんには時間ばかりかけましたことお詫びいたします。

いままた昭和26年に記念継志会発行の『継志会報』第一号が届けられた。

（図書館元参与・みわ　はるお）

平成20年度図書館関連委員会 委員名簿

◎：委員長
○：副委員長

○図書館委員会

池見　澄隆（副学長）
原田　敬一（文学部長）
東山　弘子（教育学部）
広瀬　卓爾（社会学部長）
岡村　正幸（社会福祉学部長）
二木　康之（保健医療技術学部長）
○貝　　英幸（文学部総務担当主任）
○石原　　宏（教育学部総務担当主任）
◎千葉　芳夫（社会学部総務担当主任）
○岡本　晴美（社会福祉学部総務担当主任）
○得丸　敬三（保健医療技術学部総務担当主任）
小林　隆弘（財務部長）
山﨑　高哉（図書館長）
藤堂　祐亨（図書課長）
古川　千佳（図書館専門員）
竹村　　心（図書館専門員）
飯野　勝則（図書館専門員）
志麻　克史（図書館専門員）

○図書館収書委員会

○貝　　英幸（文学部総務担当主任）
◎石原　　宏（教育学部総務担当主任）
○千葉　芳夫（社会学部総務担当主任）
○岡本　晴美（社会福祉学部総務担当主任）
○得丸　敬三（保健医療技術学部総務担当主任）
山﨑　高哉（図書館長）
藤堂　祐亨（図書課長）
古川　千佳（図書館専門員）
竹村　　心（図書館専門員）
飯野　勝則（図書館専門員）
志麻　克史（図書館専門員）

○学部選書委員

（文学部）貝　英幸、齊藤隆信、門田誠一、松田和信、鈴木文子、西川利文、坪内稔典、小野田俊蔵、若杉邦子、太田　修、持留浩二
（教育学部）石原　宏、小林　隆、奥野哲也、山口孝治、大西正倫、牧　剛史、免田　賢
（社会学部）千葉芳夫、大場吾郎、林　隆紀、松永寛明、上田道明
（社会福祉学部）岡本晴美、藤松素子、丹羽國子、若尾典子、末崎栄司、神谷栄司、中田智恵海、里見賢治、芳野俊郎、田中智子
（保健医療技術学部）得丸敬三、赤松智子、菅野圭子、石井光昭、越智淳子、日下隆一、坂口光晴、白星伸一、中野裕之、野村　嶬、藤川孝満、二木康之

○浄土宗関係コレクション選定グループ

齊藤隆信、善　裕昭、松永知海

新収資料紹介

『いはや』

―御伽草子にみる臨終観―

古川千佳

御伽草子とは室町時代から江戸時代初期ごろまでに製作された比較的短編の物語で、中世小説、室町物語、室町小説などとも呼ばれている。「御伽草子」の名は、大坂の書肆、渋川清右衛門がそれら多くの伝承作品の中から二十三篇を輯めて、享保（一七一六～三六）の頃に、「御伽文庫」として刊行したことに由来するといわれる。御伽草子は、写本、版本とも多数の作品が伝存し、豪華な絵をともなった奈良絵本のような写本から版本まで、また大型の巻子から大小、縦横型の冊子まで、多様な形で読者を楽しませてくれる。大型の冊子や絵巻物の奈良絵本は禁裏・公家、将軍・大名家の姫君たちの嫁入り道具のひとつとして調度の本棚を飾っていたし、挿絵入り版本は江戸時代の町人層をも楽しませていた。内容は、空想的なものから教訓的なものまで多岐多様に亘り、その数は三百篇を超え、様々な分類がなされている。そのうち、主人公や舞台によって公家物、宗教物、武家物、庶民物、異国・異郷物、異類物といった分類方法がとられることが一般的である。かならずしもこれらの分類通りにすべてが収まりきるわけではないが、以下にその分類の一例を示す。

公家物…主人公に禁裏や公家の貴人を据えた作品。平安王朝物語を土台にしていることが多い。

宗教物…主人公に僧侶や神官等を据えた作品。稚児譚、発心譚、神仏の起源を語る本地物など。

武家物…主人公に武士等を据えた作品。中世の軍記物語『平家物語』等を題材にしたものが多い。

庶民物…主人公に庶民を据えた作品。※それまでの日本の文学作品に庶民が主人公として描かれることはほとんどなかったので、画期的ということができる。庶民に身近な題材が日本の近世人を読書へと導いたという功績は大きいものがあり、『ものぐさ太郎』『浦島太郎』『一寸法師』などの作品は現在も昔話として身近な存在であろう。

異国・異郷物…唐天竺や空想の国等に舞台を設定した作品。

異類物…主人公に人間以外の動植物や器物などを据えた作品。動植物、器物などのみを描くものと、人間との交渉を描くものがある。

これらの御伽草子の中の何篇かの内容はこれまでにどこかで読ん

だり聞いたりしたことのある作品であったり、知っている話が含まれていたりするということをおそらくどなたも経験されているであろう。老若男女、庶民の間で語り継がれた話が多く含まれており、庶民の文学ともいわれる所以である。

『いはや』の書名については、置き去りにされた主人公の姫が一時期育てられた住居に因むものであり、『岩屋の草子』『岩屋』『岩屋物語』『岩屋姫物語』『対の屋姫物語』などの多様な名称で呼ばれている。本文系統についても、和歌を多く含む本文から簡略化された表現の本文をもつものまで多様な形で伝承されており、現在は散佚して存しない王朝物語『いはや』を改作した御伽草子といわれている。既述の分類としては主人公が公家の姫君であることから、「公家物」ということになるが、実母をなくし、継母に育てられる過程での不遇を抱えた物語であることから、「継子物」といわれることもある。

また、公家物とはいえ、登場人物の行動範囲は都から九州にわたっており、途中には、貴族の目からは貧しく賤しい者とされていた海人など庶民の暮らしのありようが多く含まれていると同時に、当時の暮らしの中の仏教に関わる言葉が多出するのも特色のひとつである。

たとえば、御本尊、無常、憐れみ、文殊の化現、一周忌、第三年、書写の山、御命日、来迎、阿弥陀、焼香、金泥の法華経、皆水晶の数珠、御経、臨終、後生善処、奈落、功力、十悪五逆、上品蓮台、仏性、念佛百遍、行者、冥途の旅、妄念、菩提、供養、往生、地獄、六道、輪廻、出家、要文、法文、魔縁、不思議、かみそりなどである。

以下は主人公である対の屋姫が十数歳の若さで継母の謀により海へ沈められそうになる場面のことである。

継母より姫をなきものにせよとの命を受けた家来は、昏睡状態の主人公を海に投げ込む際に、姫をそのまま海中へ投ずるべきか、あるいはみずからの死を自覚させて沈めるべきかを悩んだ末に、姫を眠りから覚ますことを選択して臨終の念仏を促す。戦や病の中での避けがたい死を前にしての臨終ではなく、突然、死を強制される少女に臨終の念仏をすすめるのである。

家来は結局のところ、姫を海に沈めることができず、岩の上に置いて去るのであるが、二十八歳でこの世を去った実母の菩提を弔う日々を送ってきた姫の生活もさることながら、この家来の心の動きと行動は中世日本人の死生観、臨終観の一端を垣間見せてくれる。

本学所蔵の『いはや』は小ぶりの縦型奈良絵本で、本文料紙は金箔を多用した豪華本ではないが、登場人物の目鼻には愛らしさがあふれた筆遣いがみられるものである。中冊末近い部分で、明石浦を出発間近に姫がいなくなり、大騒ぎとなった一行の様子を記す箇所が欠落している。なお、岩屋の草子は最初にあげた渋川版「御伽文庫」には含まれていない。

【ものがたりのあらすじ】

主人公の姫の父・堀河中納言は妻（姫の実母）と死別し、三年後に後妻・北の政所を迎えた。後妻を迎えるにあたって、先妻の遺児である姫は対の屋に部屋を移ったので、それ以降、対の屋の姫君と

よばれるようになった。この物語が『対の屋姫物語』とも呼ばれるのは、この居室名にちなんでいる。対の屋姫は和琴、琵琶などに秀で、見目麗しく育っていたが、実母の病、早世から沈みがちのくらしとなり、自室にこもって母を弔う日々を送るようになる。後妻には主人公の姫より一歳年上の娘があり、表向きには平穏の時が流れていたが、父・中納言が太宰帥となったため、一家で筑紫国へと下向する。海路の途中、明石の浦に停泊し、翌朝の出発を控えた夜、継母の謀によって対の屋姫は、海に沈められようとするが、殺しきれなかった家来によって海上の岩の上に置き去りにされる。姫は舟で通りかかった海人に救われ、明石の浦の海人夫婦の岩屋で暮らすことになった。

一方、中納言等は、姫は海へ沈んだものと思い、姫の婚約者四位少将は、悲しみのあまり出家する。一周忌、三回忌の法要を終えたころ、二位中将という皇子が、湯治の帰途明石浦に通りかかった際、姫を見染めて都へ連れ帰る。二位中将の母である北政所は息子が海人の子を寵愛していると知り、嘲笑するため姫を呼び出す。しかし予想に反する姫の美貌と教養の高さに、周囲の者たちも感嘆せずにはいられなくなった。正式に妻となった姫は、中将との間に子をもうけ、一族繁栄、栄華を極めたという。

本学所蔵資料『いはや』の書誌調査にあたり、国立公文書館内閣文庫、国立国会図書館古典籍資料室、大東急記念文庫において貴重な資料の閲覧を快く御許可いただきましたことに心より感謝申上げます。

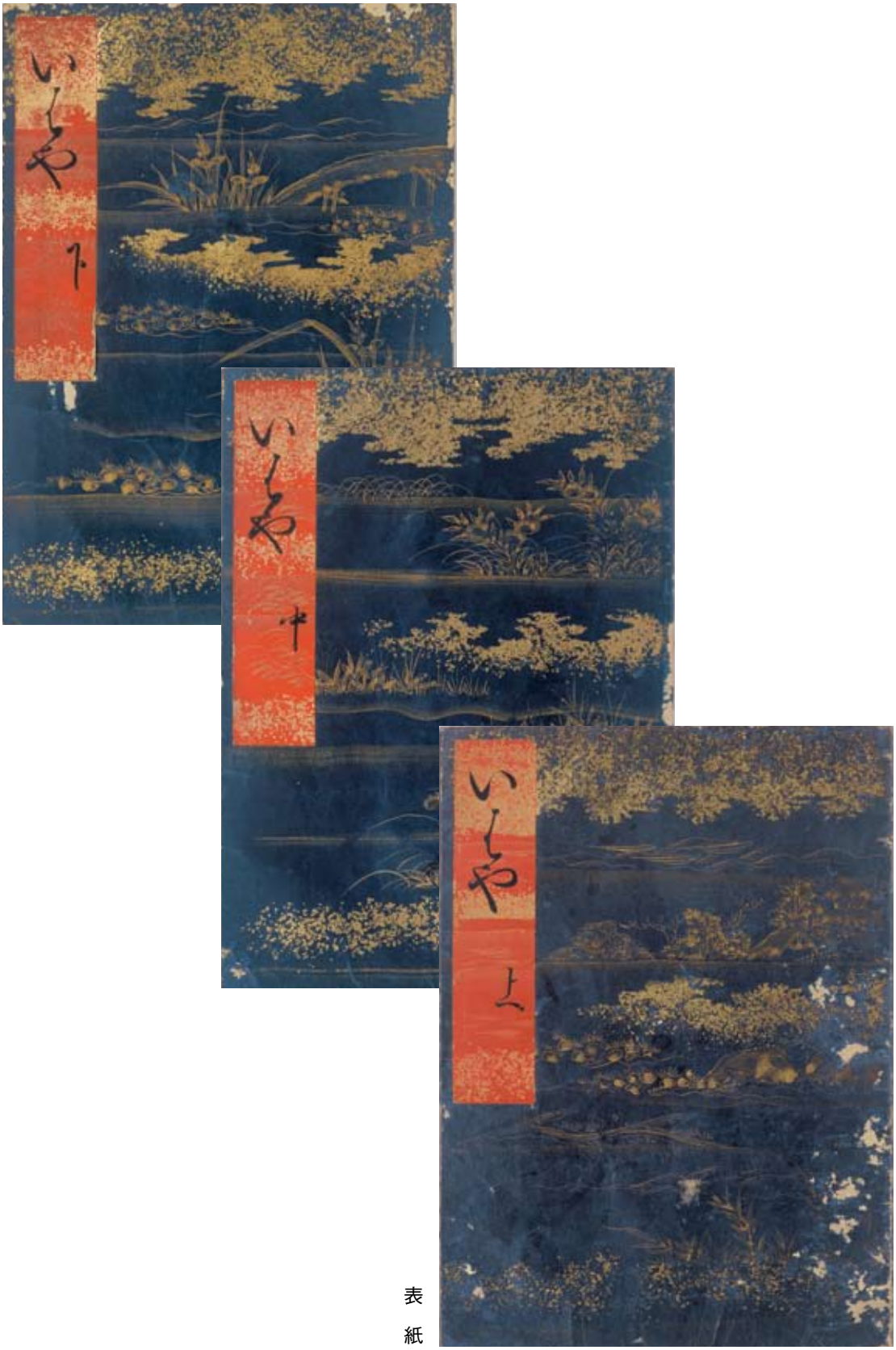
なお余談ながら、大東急記念文庫蔵『岩屋』の詞書には界線の替りに各行天部に針穴で印が付けられている。筆者は絵巻物の詞書にこのような工夫のあることを平成十一年、前任の京都大学附属図書館において創立百周年記念展示を行うに当たって学内所蔵の御伽草子百点余すべての書誌調査を行なった際、発見したのであるが、美術品的意味合いのある絵巻物には墨跡の残らない押界さえも邪魔なものとしてなんとか考えられた方法だったようである。

（図書館首席専門員・ふるかわちか）

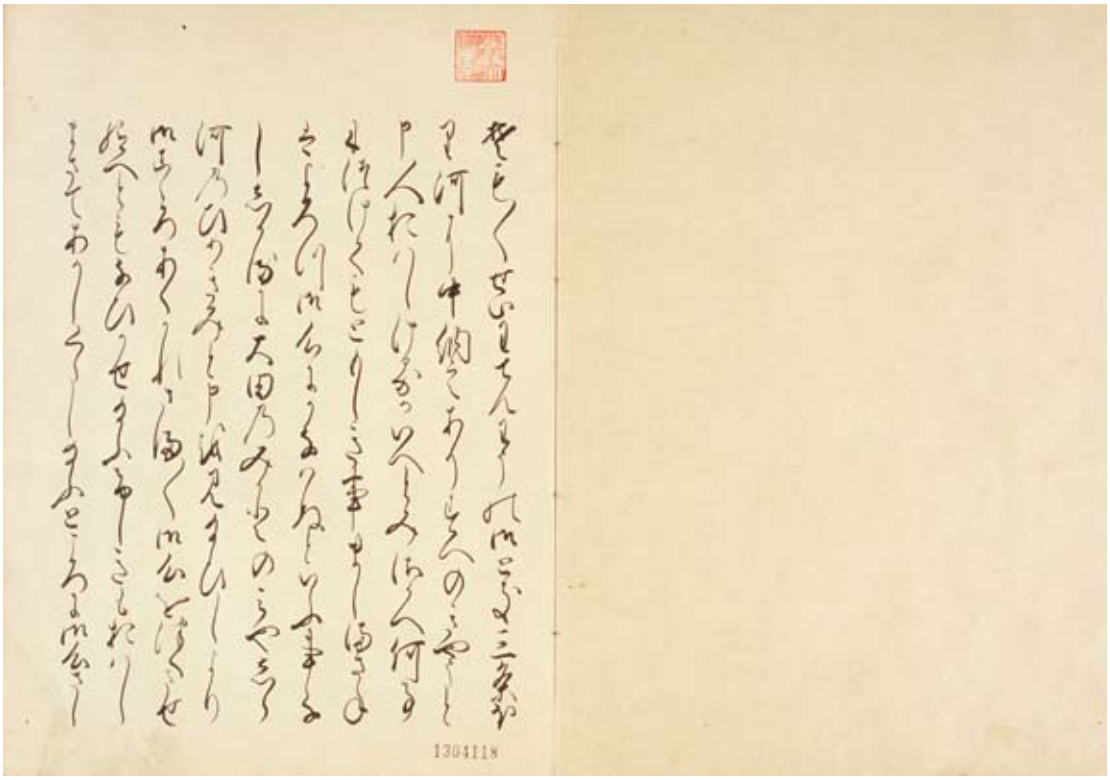
【書誌】

金砂子、金彩の草花をあしらった紺色表紙に朱色題簽が貼付され、本書の書名「いはや」はこの題簽に墨書された外題によるものである。見返しには銀の箔を置き、その上に金銀の小さな切箔をちらしたつくりは、冊子形奈良絵本の典型的な装訂の一つである。

標題：いはや
通称：岩屋の草子（統一書名）
外題：いはや
内題：無し
製作：江戸時代中期ごろか
形態：列帖綴
数量：上中下三冊
題簽：朱色地に金彩草木下絵
表紙：紺色地に金彩草木絵表紙
見返：銀箔置紙（布目）に金銀切箔散し
本紙：雁皮紙に奈良絵（十葉）および墨書詞書
大きさ：縦二三・六×横一六・八㎝
詞書：漢字交じり平仮名文



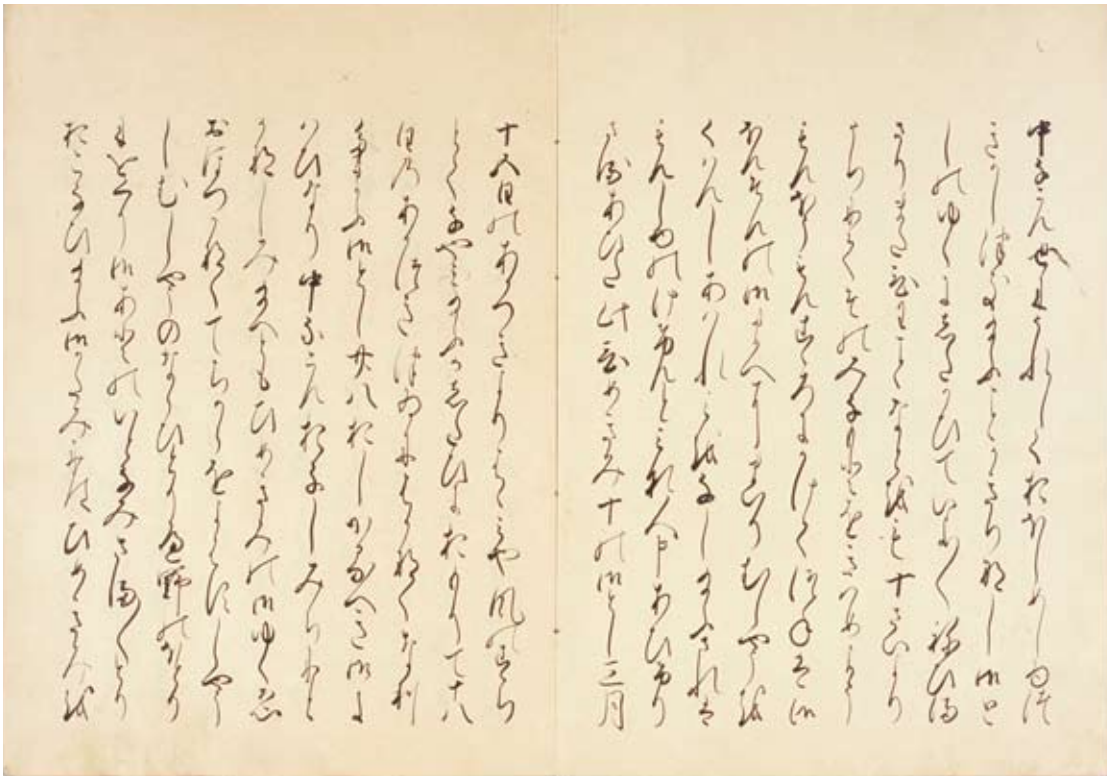
表紙



そも〳〵せいわてんわうの御とき三条ほ
り河に中納言ありすへのきやうと
申人おはしけるかいへとみさかへ何事
につけてもともしき事ましまさね
はよろつ御心にかなはぬといふ事な
ししかるに大田のみかとのみやしら
河のひめきみと申を見給ひしより
御こゝろあくかれさま〳〵御心をつくさせ
給へともなひかせ給ふけしきもおはし
まさてあかしくらし給ふところに御心さし

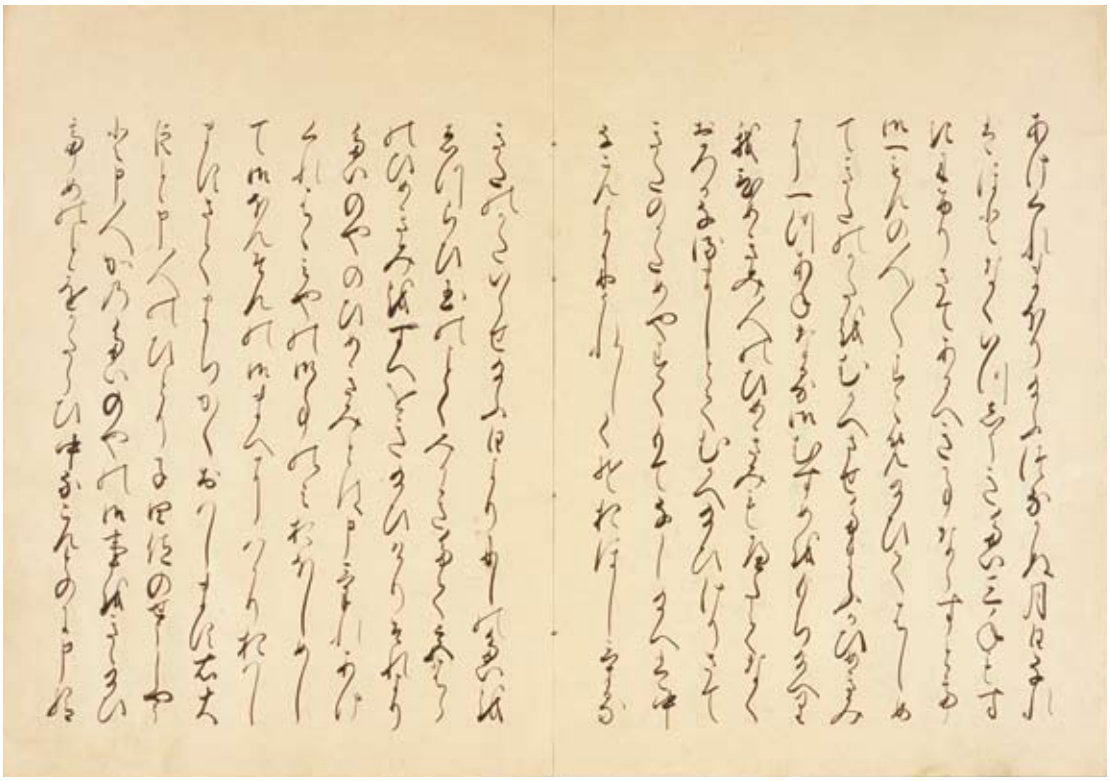
▲母宮御産

のいろふかくありしかはなんによのならひ
のわりなさはうらふくかせとつゐになひかせ
給ひけりたひかさなれは人しりてま
ことに雲の上人ももてなしかしつき
たてまつるちきりくちせぬ
ならひにてみやくわいにんし給ひぬ
月日かさなれはほとなく御さん
へいあんせさせ給ふあたりも
かゝやくはかりなるひめきみ
にてそおはしける



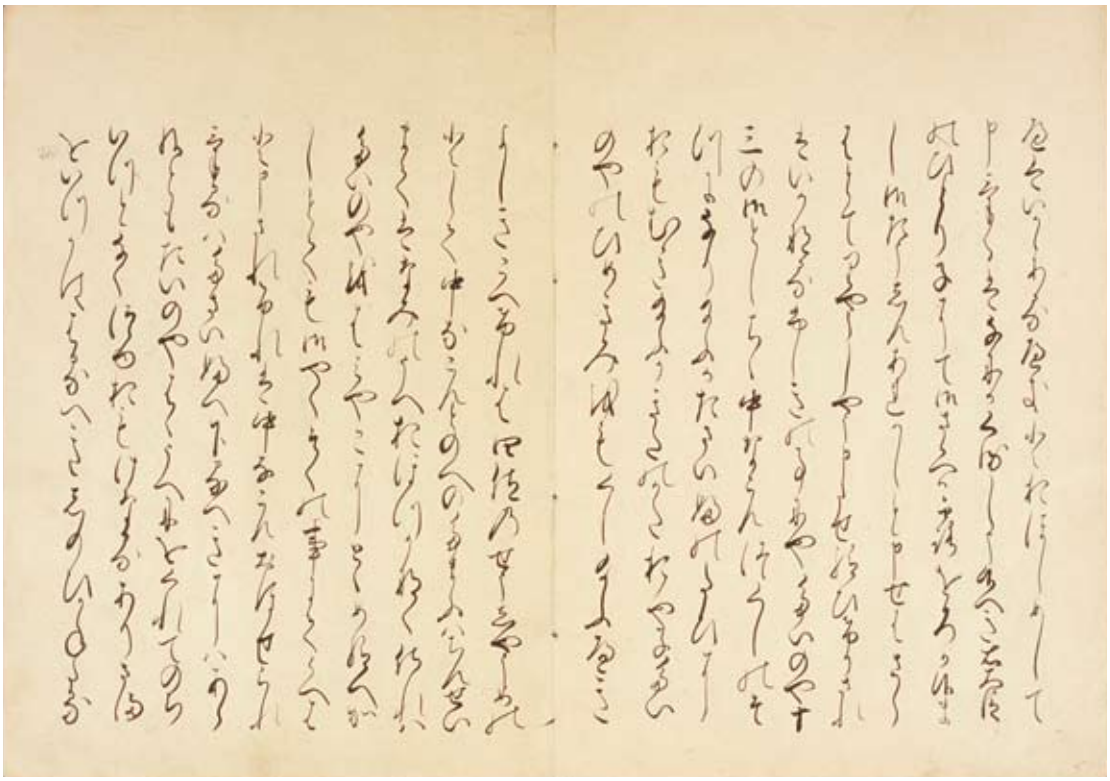
中なこん世にうれしくおほしめしゐつ
きかしつき給ふことかきりなし御と
しのゆくにしたかひていよ〳〵ねひま
さりまたひわことなとをも十さいより
うちにてそのみなもとをきはめよう
もんほうもんこゝろにかけてつねは御
ほんそんの御まへにまいりむしやうを
くはんしあはれみをなし給ふされは
もんしゆのけけんとみな人申あひけり
さるあいた此ひめきみ十の御とし三月

十五日のあかつきよりはゝみや風のこゝち
とてなやみ給ふかしたひにおもりて十八
日のあかつきつゐにはかなくなり
たまふ御とし廿八おしかるへき御よ
はひなり中なこんおなしみちにと
かなしみ給へともひめきみの御ゆくゑ
おほつかなくてちからをよはすしやう
しむしやうのならひとりへ野のほとり
にをくり御あとのいとなみさま〳〵とり
おこなひ給ふ御かたみにはひめきみを



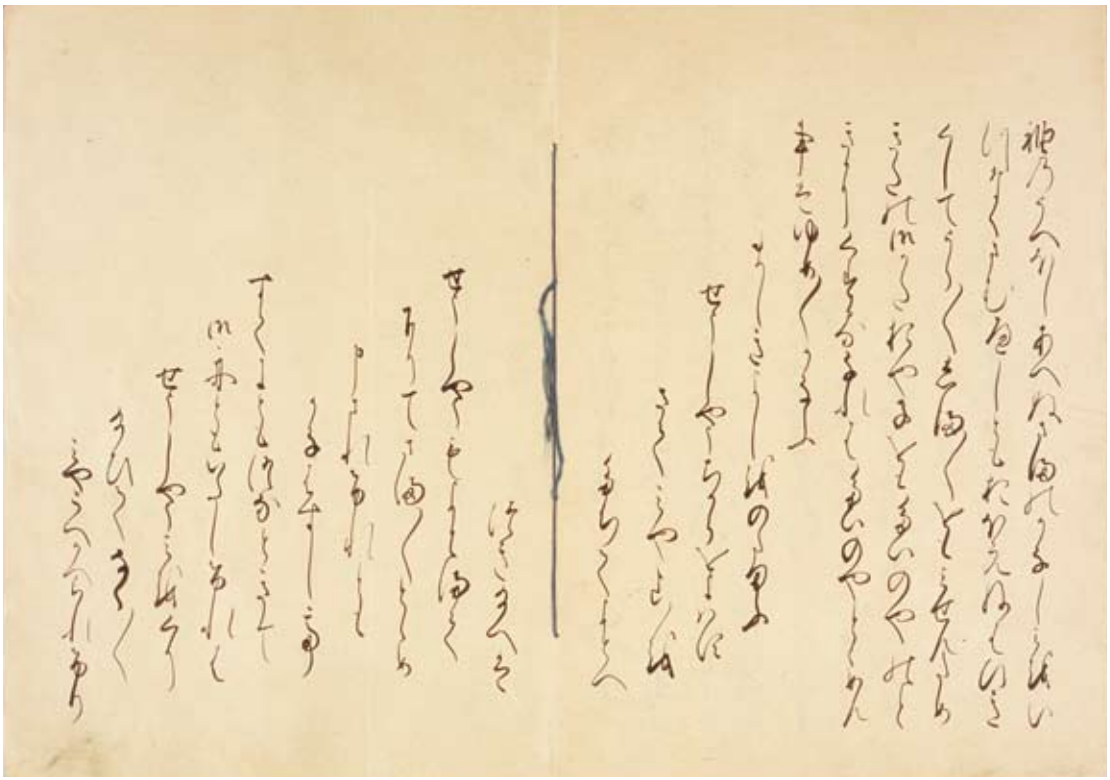
あけくれまほり給ふつなかぬ月日なれ
はほとなくいつしうきたい三年もす
きにけりさてあるへき事ならすとて
御一もんの人〳〵すゝめ給ひてはしめ
てきたのかたをむかへさせたまふかひめきみ
に一つあねなる御むすめをもち給へり
我ひめきみ人のひめきみもへたてなく
おろかなるましとてむかへ給ひけりさて
きたのかためやすくもてなし給へは中
なこんよにうれしくそおほしける

きたのかたいらせ給ふ日よりにしのたいを
しつらひ玉のことくみかきたて宮はら
のひめきみをすへをき給ひけりそれより
たいのやのひめきみとは申けれあけ
くれはゝみやの御事のみおほしめし
て御ほんそんの御まへにはかりおはし
ますさてまちかくおはします右大
臣と申人のひとり子四位のせうしやう
と申人かのたいのやの御事をきゝ給ひ
てめのとをかたらひ中なこんとのに申給



へはいかゝあるへきとおほしめして
申けるはなにかくるしう候へき右大臣
のひとり子にて御さ候へは露をろか候ま
し御たうしんあれかしと申せはさら
はとてりやうしやう申させ給ひけりされ
はいかなるけしきの事にやたいのや十
三の御としちゝ中なこんつくしのそ
つになり給ふかたさいふのたひに
おもむき給ふかきたのかたおや子たい
のやのひめきみをもくし給ふへき

よしきこへけれは四位のせうしやうめの
として中なこんとのへのたまふはちんせい
まてはなみのうへおほつかなく侍れは
たいのやをはみやこにとゝめ給へか
しとても御やくそくの事にて候へは
と申されけれは中なこんおほせられ
けるはたさいふへ下るへきにはあら
ねともたいのやはゝうへにをくれてのち
いつとなくつゆおもけなるありさま
をいつかははるへきしのひかねたる

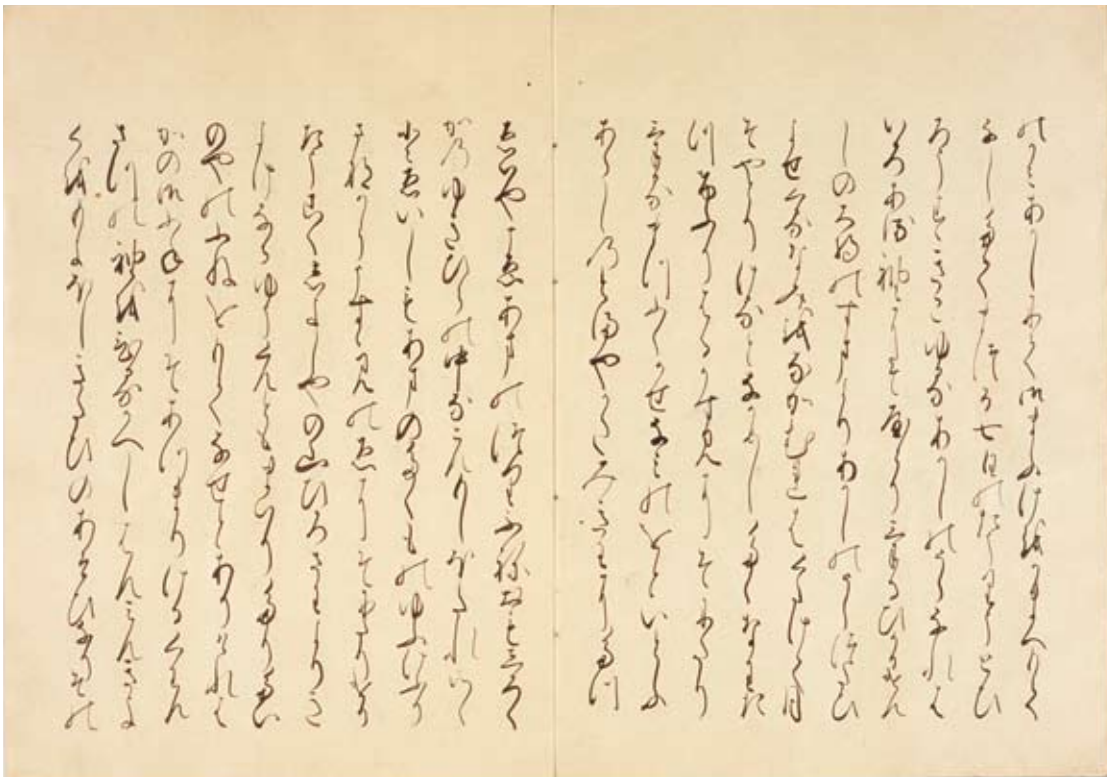


袖のうへほしあへぬさまのかなしみをい
つなくさむへしともおほえねはひき
くしてうら〳〵しま〳〵をもみせんため
きたの御かたおや子をもたいのやのと
きにくするなれはたいのやとゝめん
事はゆめ〳〵かなふ
ましきよしをのたまふ
せうしやうちからをよはす
さてみやこを
たちてよとへ

つき給へは
せうしやうもよとまて
下りてさま〳〵とゝめ
申されけれとも
かなはすして
すてにともつなときて
御舟ともいたしけれは
せうしやうみをくり
給ひてなく〳〵
みやこへかへられけり

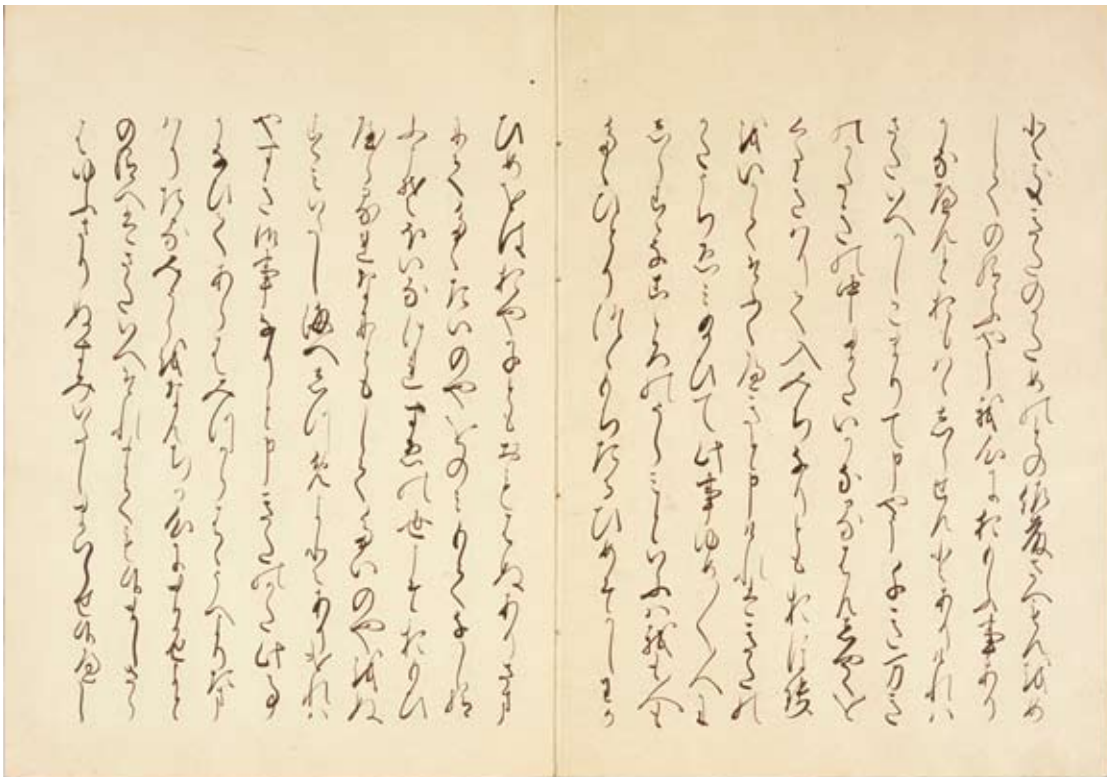
▲淀出発

さてそつとのくたり給へは江くちかんさき
のゆうくんともまいりけるそつとの御らん
して我をおもはゝたいのやのふねを
もてなせとありけれはゆうくんとも
たいのやのふねにまいりいまやうをも
しろくうたひすましけれはれうら
きんしうをかすしらすたひにけり
にしのみやなんくうのおきをすきて
つくしへとをり給ふかそつとのははりま
のこくしにておはしけれははりま

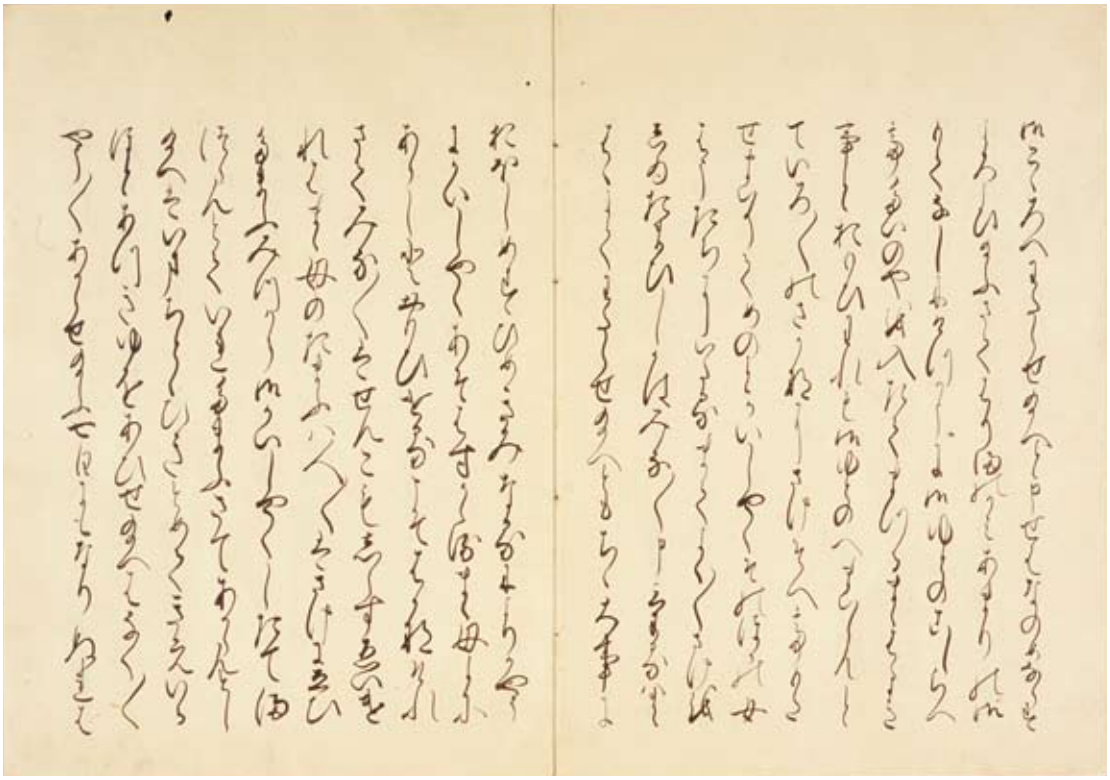


のかみあかしにて御まふけをかまへもて
なしたてまつる七日のたうりうとひ
ろうすきこゆるあかしのうらなれは
いろある袖にそやとりけるひかるけん
しの大将のすまよりあかしのうらつたひ
よせくるなみをなかむれはくたけて月
そやとりけるとなかめしたゝなわた
つけふりはるかすみにそにたり
けるまつふくかせなみのをといとふ
あらしのとまやかたみきわにたつ

ゑいやこゑあまのつりふねおもしろく
かのゆきひらの中なこんもしほたれつゝ
とゑいしもあまのたくものゆふけふり
さなからうすゝみのゑにそにたりけり
たうこくしよしやの山ひろさわよりき
よけなるゆうくんともまいりたりたい
のやのふねをもてなせとありけれは
かの御ふねにそあつまりけるくわん
さつの袖をひるかへしはんみんきよ
くをもよほしきたひのあそひなりその

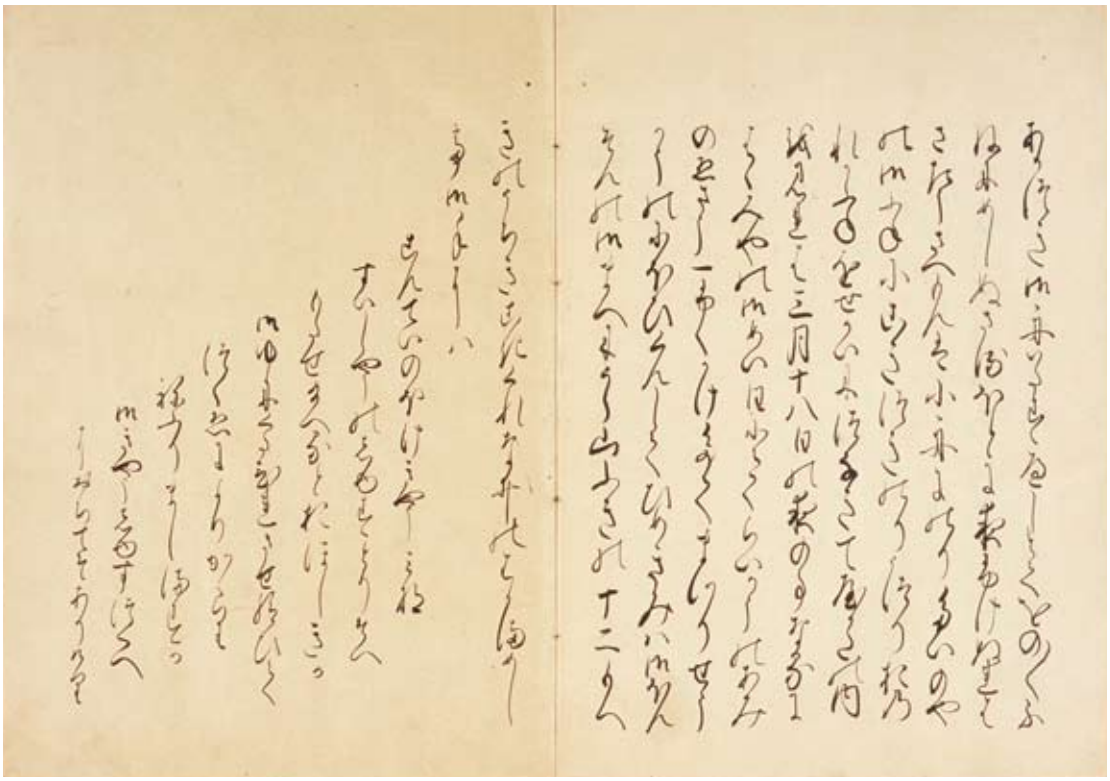


とききたのかためのとの佐藤さへもんをめ
しての給ふやう我心におもふ事あり
かなへんとおもはゝしらせんとありけれは
さたいへかしこまりて申やう千き万き
のかたきの中またいかなるはんしやくを
くたきはりて入みちなりともおほせ
をいかてそふくへきと申けれはきたの
かたうちゑみ給ひて此事ゆめ〳〵人に
しらすなこゝろのうらみといふは我も人も
たゝひとりつゝもちたるひめそかしわか
ひめをはおや子ともおもはぬありさま
にてたゝたいのやをのみもてなし給
ふこそほいなけれすゑの世こそおもひ
やらるれなにともしてたいのやをぬ
すみいたし海へしつめよとありけれは
やすき御事なりと申きたのかた此事
かなひてあらはみつからはゝうへよりたま
はりたるみうらをなんちか心にまかせよと
の給へはさたいへそれまても候ましさら
はゆふさりぬすみいたしまいらせ候へし



御こゝろへわたらせ給へと申せはなのめならす
よろこひ給ふさてはりまのかみあまりの御
もてなしにけつかうに御ゆとのこしらへ
てたいのやを入たてまつるまゝはゝよき
事とおもひわれも御ゆとのへまいらんと
ていろ〳〵のさかなにさけそへてもた
せまいりてめのとかいしやくそのほかの女
はうたちにいたるまてよく〳〵さけを
しゐたまひしかはみな〳〵申けるはまゝ
はゝにてわたらせ給へともちゝ大事に

おほしめすひめきみなるによりかやう
にかいしやくあそはすかゝるまゝ母よに
あらしとおもひけるこそはかなけれ
さてみな〳〵はせんこもしらすゑいけ
れはまゝ母のたまふは人〳〵はさけにゑひ
たまふみつから御かいしやくしたてま
つらんとていれたまふさてあからんとし
給へはいまちとゝひきとめてきえいる
ほとあつきゆをあひせ給へはなく〳〵
やう〳〵あからせ給ふ七日にもなりぬれは



あかつき御舟いたすへしとてをの〳〵ふ
ねにめしぬさるほとに夜ふけぬれは
さたうさへもんは小舟にのりたいのや
の御ふねにこきつきのりうつりおの
れかふねをせかいにつなきてやかたの内
をみれは三月十八日の夜の事なるに
はゝみやの御めい日とてらいかうのあみ
のゑさう一ふくかけたてまつりせう
かうのにほひくんしてひめきみは御ほん
そんの御まへにうら山ふきの十二もへ

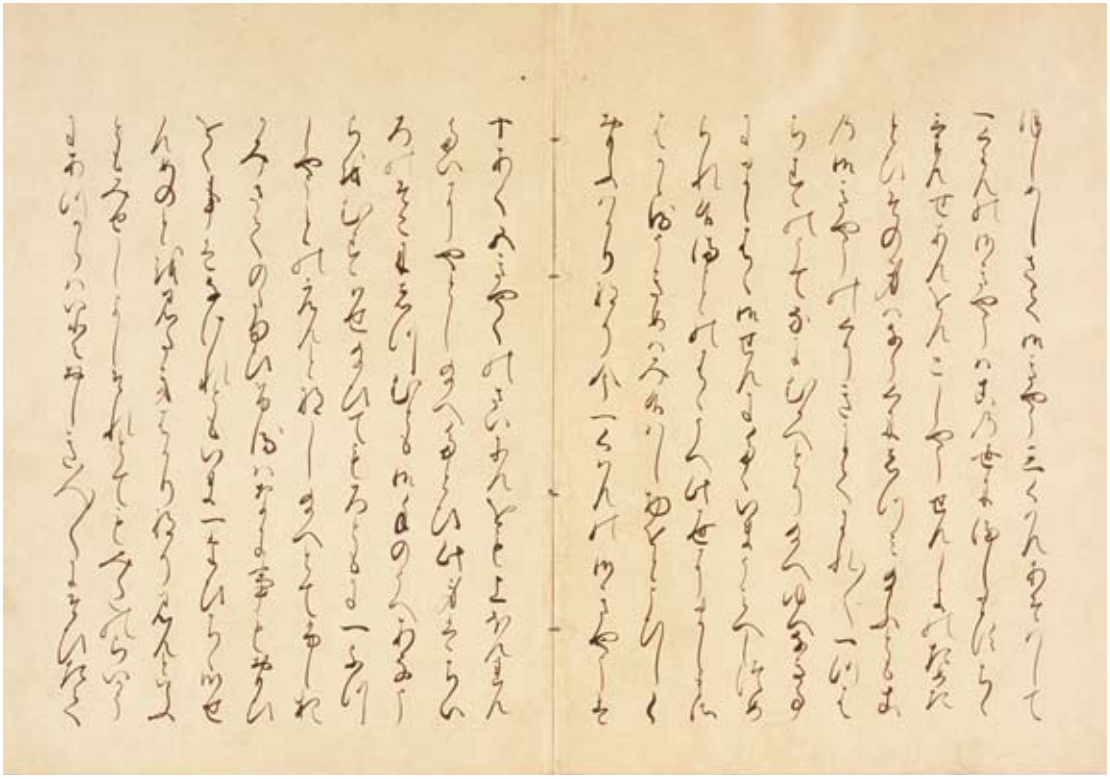
きのうちきこきくれなゐのはかまめし
て御手には
こんていのほけきやうみな
すいしやうのしゆすとりそへ
もたせ給へるとおほしきか
御ゆにくたひれさせ給ひて
つくゑによりかゝり
ねふりましますか
御きやうしゆすつくへ
におちてそありけり

▲湯にくたびれて寝入る姫

さたうさへもんやはらさしより御きやうし
ゆすまつとりてそてにさしいれともし
火うちけしかきいたきたてまつるめ
のとかとおほしめし御手をさしのへいた
かれ給ふつや〳〵御めもあかさせたま
はすさたうさへもんおのれかふねにのりう
つりはるかのおきへこきいつるさて
このまゝうみにいれたてまつるへき
かいや〳〵をこしたてまつりりんちう
をすゝめ申さんとおもひおこしたてまつり

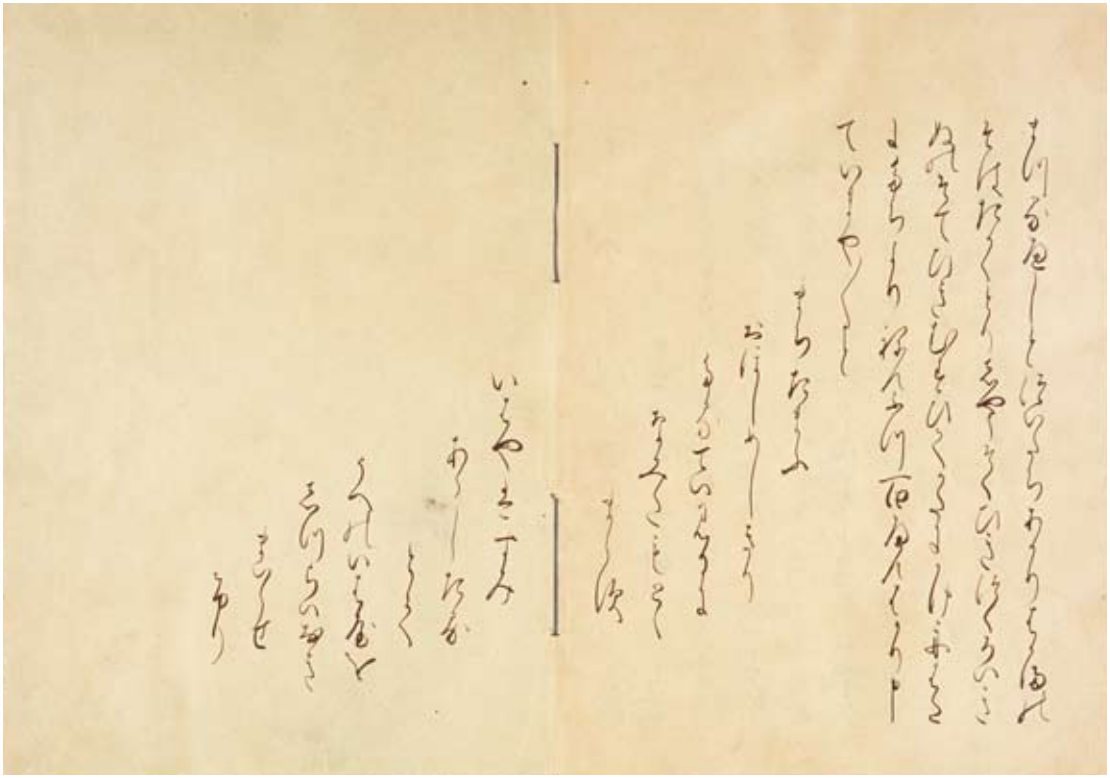
けれはひめきみおとろきたまひてあた
りをみたまへはめしたる御ふねにはあら
ていやしきおとこ一人ゐたりこれはゆめ
かやとおほしめしいかなることそとの
たまへはこれはまゝはゝ御せんの御かたに
さたうさへもんと申ものにて候かいかなる
御とかやらんうみへしつめよとおほせ候
御りんちうのねんふつ申させ給へと申
せはひめきみきこしめしわれなにの
とかありともおほへすさりなからなんち

こゝろありてりんちうをしらすること
のうれしさよとてものなさけにしは
しのいとまをゑさせよはゝうへにをくれた
てまつりてのちまい日御きやうよみた
てまつるにまゝ母御せんけしからす
ゆをあひせたまひしかはそのくたひれ
によりてけふは御きやうよみはてすよみ
はてなはしつめよとおほせけれはさ
たうさへもんふところより御きやうしゆすとり
いたしたてまつるひめきみうれしくお



ほしめしさて御きやう三くはんあそはして
一くわんの御きやうはこの世にましますちゝ
けんせあんをんこしやうせんしよのためた
とひその身はならくにしつみ給ふともこ
の御きやうのくりきにてわれ〳〵一つは
ちすのうてなにむかへとり給へゆへなき事
にまゝはゝ御せんにたゝいまうみへしつめ
られ候まことのはゝうへ此世にましまさ
はかゝるうきめはみ候はし物をとこひしく
おもふはかりなり今一くはんの御きやうは

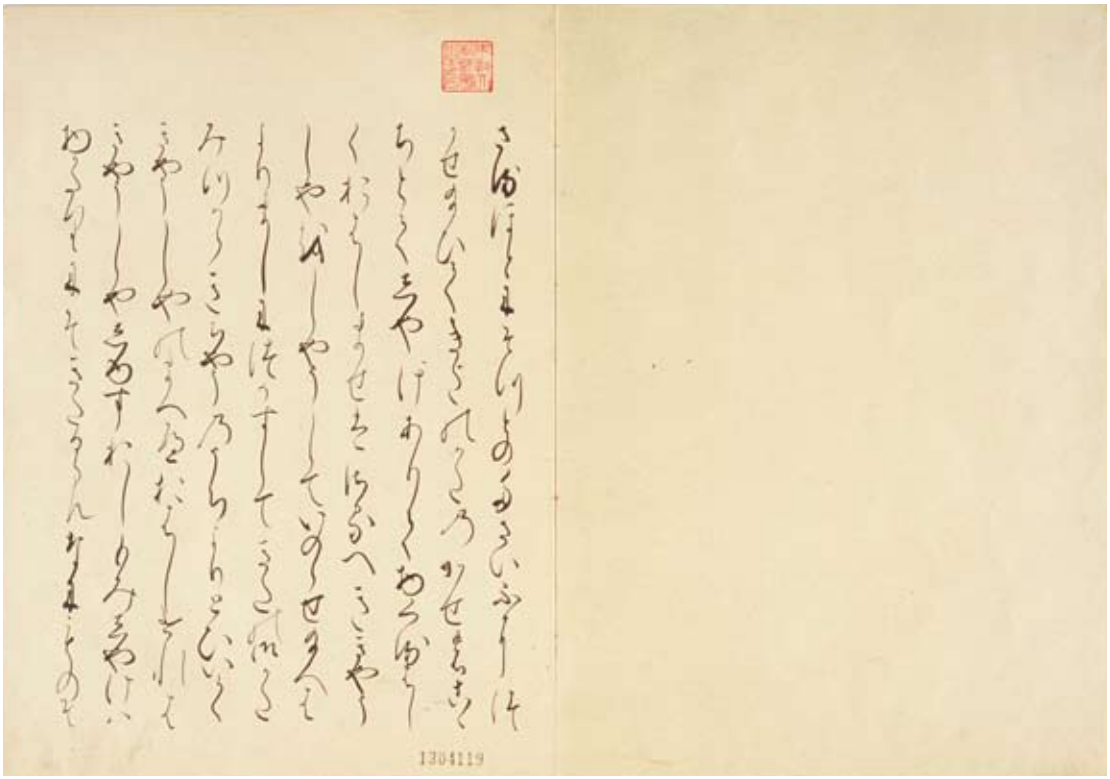
十あく五きやくのさいにんをも上ほんれん
たいにやとし給へたとひ此身はちい
ろのそこにしつむとも御手のうへあなう
らをむすはせ給ひてもろともに一ふつ
しやうとのえんとなし給へとてふしお
かみさてのたまひけるはなに事もおもひ
をく事はなけれともいま一たひちゝ御せ
んめのとをみたきはかりなり見んといふ
ともみせしよしそれとてもみたのらいかう
にあつからはいとおしき人〳〵にそひたて



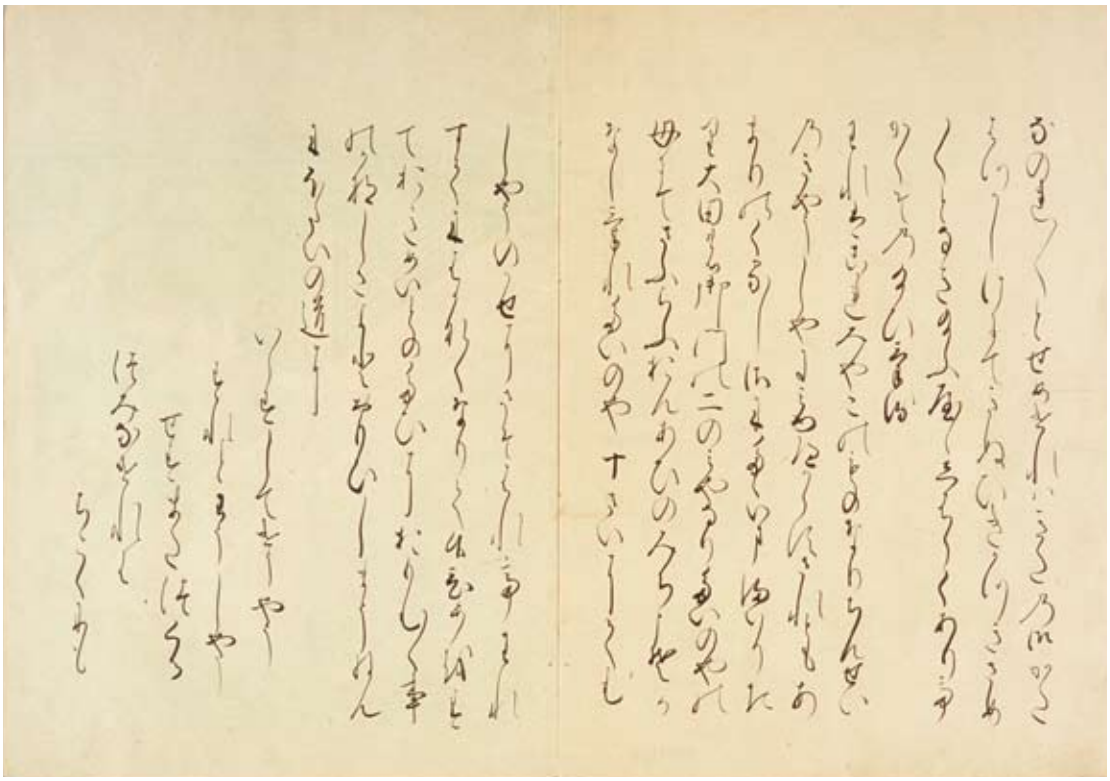
まつるへしとついたちあかりはかまの
そはたかくとりしやうそくひきつくろいき
ぬのそてひきむすひてかたにかけ舟はた
にたちよりねんふつ百へんはかり申
ていまや〳〵と

まちたまふ
おほしめしきり
たるてい見るに
なみたもと、
まらす

いはやはすみ
あらしたる
とて
うへのいは屋を
しつらいおき
まいらせ
けり



さるほとにそつとのたさいふにつ
かせ給ひてきたのかたのかせのこゝ
ちとてしやけありて物くるはし
くおはしませはさるへききやう
しやをしやうしていのらせ給へは
よりましにつかすしてきたの御かた
みつからきちやうのうちよりとひいて
きやうしやのまへへおはしけれは
きやうしやしゆすおしもみしやけは
物かたりにそきたるらんなにものそ

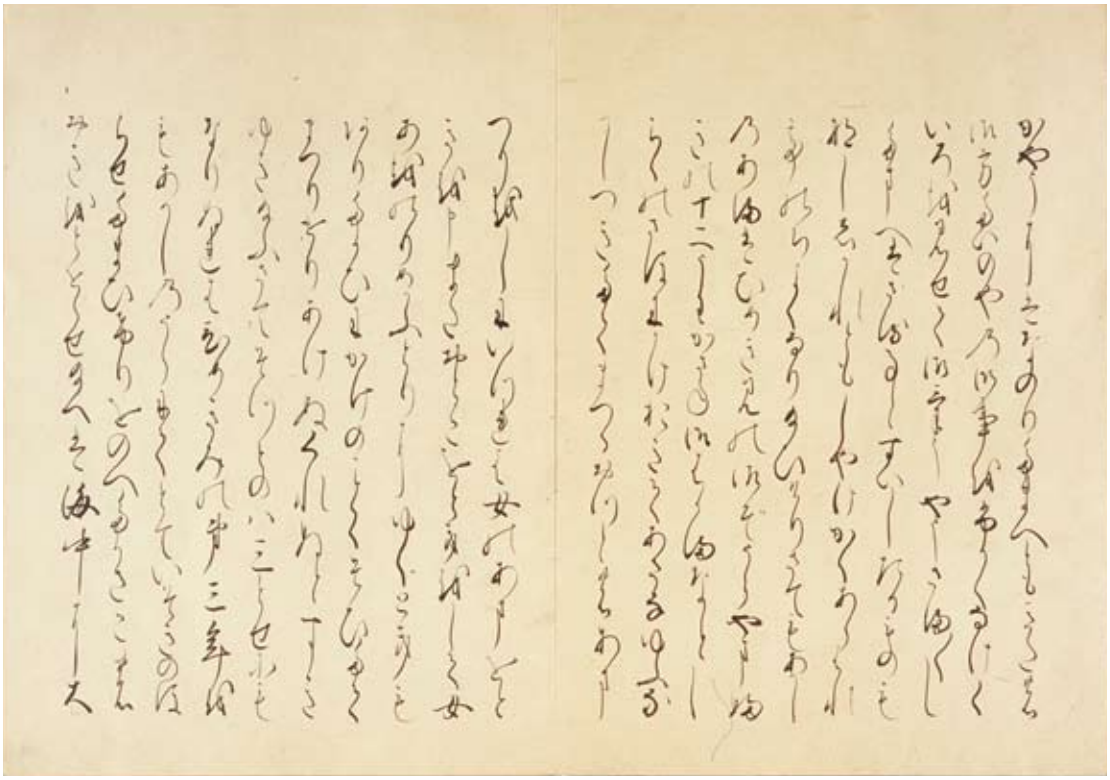


なのれ〳〵とせめけれはきたの御かた
はつかしけにてきぬひきかつきさめ
〳〵となき給ふや〳〵しはらくありて
かくその給ひける
われはこれみやこのものなりちんせい
のきやうしやにみゆへからすされともあ
まりのくるしさにたゝいままいりた
り大田の御門の二のみやなりたいのやの
母にてさふらふおんあひのみちこそか
なしけれたいのや十さいにてむ

しやうのかせにさそはれてわれ
すてにはかなくなりて候ひめをす
ておきめいとのたひにおもむく事
のかなしさよとおもひしまうねん
にほたいの道に
いらすしてけうやう
すれとわうしやう
せすまたつくる
つみなけれは
ちこくにも

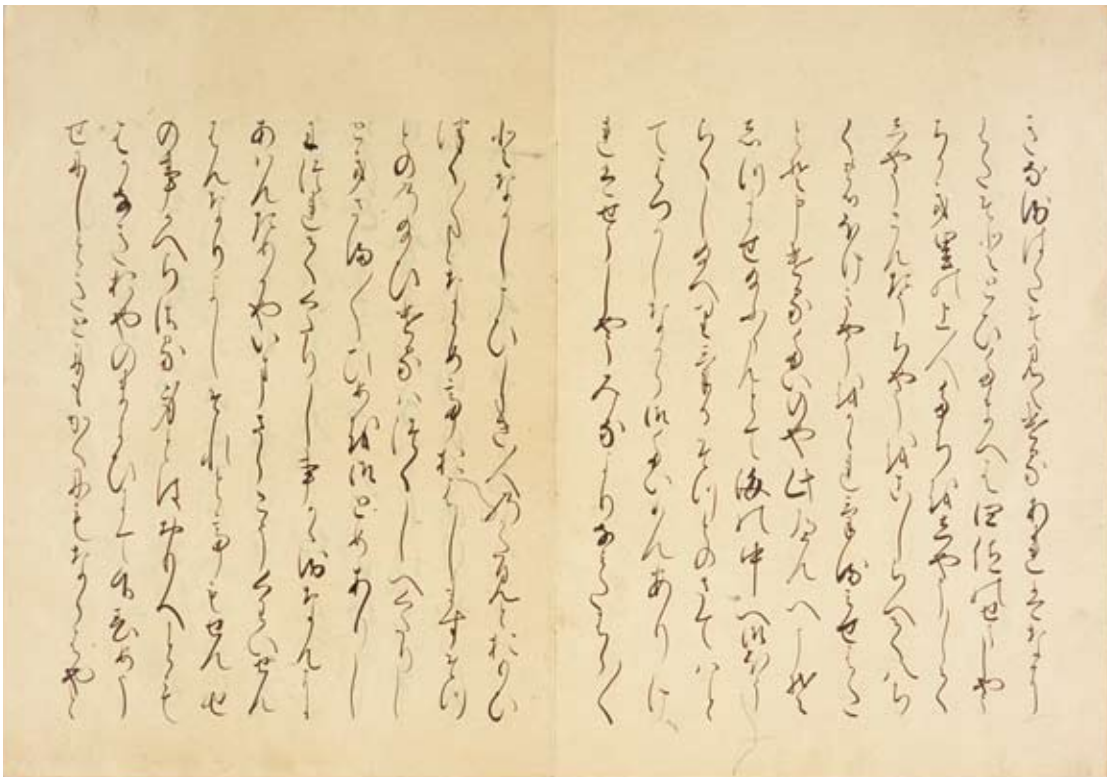
おちす六たうにたゝゑひぬ
あさゆふまもるかひも
なくなにのとかに
よりたいのやをは
あかしのうみへはしつめ
たまふそあらほいなや
うらめしやとの給ひて
さめ〳〵とそ
なき給ひ
ける

▲筑紫にて風邪に臥せる北の方と祈祷する行者



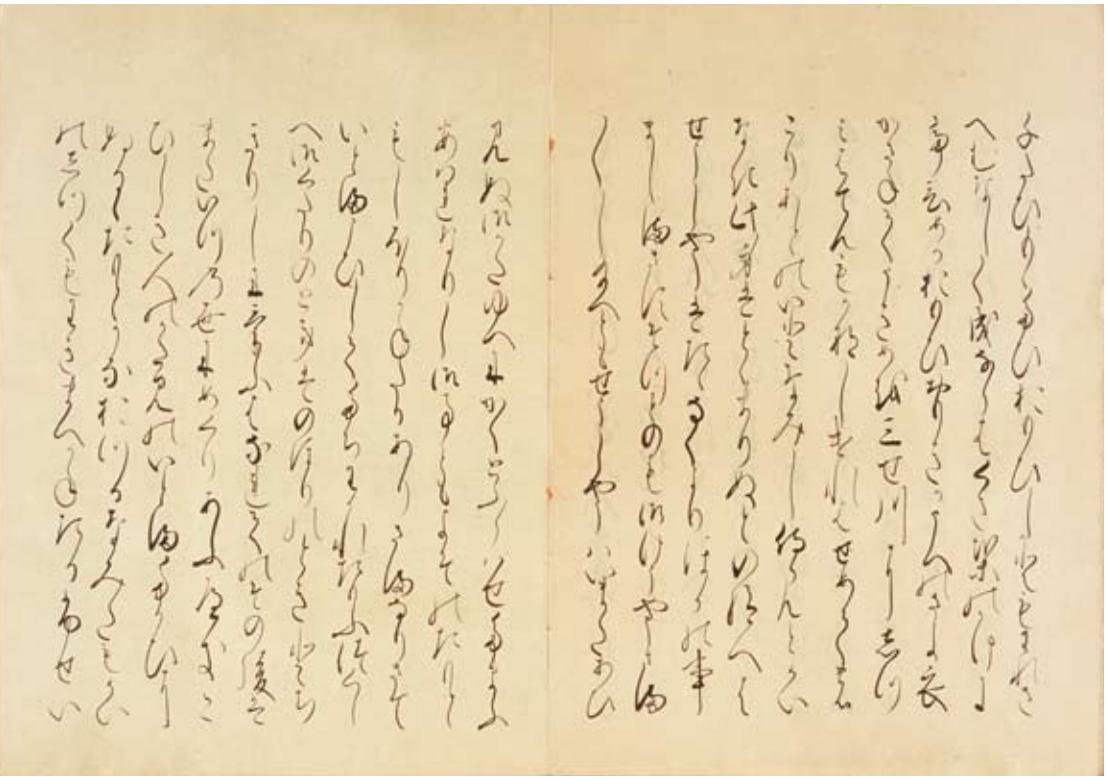
かやうにはなのりたまへともきたの
御方たいのやの御事をふかくなけく
いろを見せて御けうやうさま〳〵し
たまへはさる事とすいしたるものも
なししかれともしやけかくあらはれ
てのちよくなり給ひけりさてもあかし
のあまはひめきみの御ぞうらやまふ
きの十二うわかさね御はかまなとし
ちくのさほにかけおきてあさなゆふな
かしつきたてまつるおつとのあま

つりをしにいつれは女のあまをと
きを申またおとこをときをして女
あをのりめかふとりにゆくときも
ありたかひにかけのことくそひたて
まつりけりあけぬくれぬとすき
ゆき給ふさてそつとのは三とせにも
なりぬれはひめきみの第三年を
もあかしのうらにてとていそきのほ
らせたまひけりをのへたかさこの
おきをとをらせ給へは海中に大



きなるはたそ見えけるあれはなに
はたそととひたまへは四位のせうしやう
ちかき里の上人たちをしやうして
しやうこんたうちやうをこしらへて八ち
くのほけきやうをかゝれけるみせはた
とそ申けるたいのや此へんへこそ
しつませ給ふらんとて海の中へ御ほう
らくし給へりけるそつとのさてはと
てはつかしなから御たいめんありけ
れはせうしやうみるよりなみたはら〳〵

となかしこひしき人のかたみとおもひ
つく〳〵となかめておはしますそつ
とのの給ひけるはつくしへくたりし
ときさま〳〵ひめを御とめありし
につれてくたりし事かゝるなんに
あはんためかやいまさらこうくわいせん
はんなりよしそれとてもせんせ
の事かへらさる身とはおもへとも
はかなきおやのまよひにて候ひめう
せにしときとにもかくにもならはやと

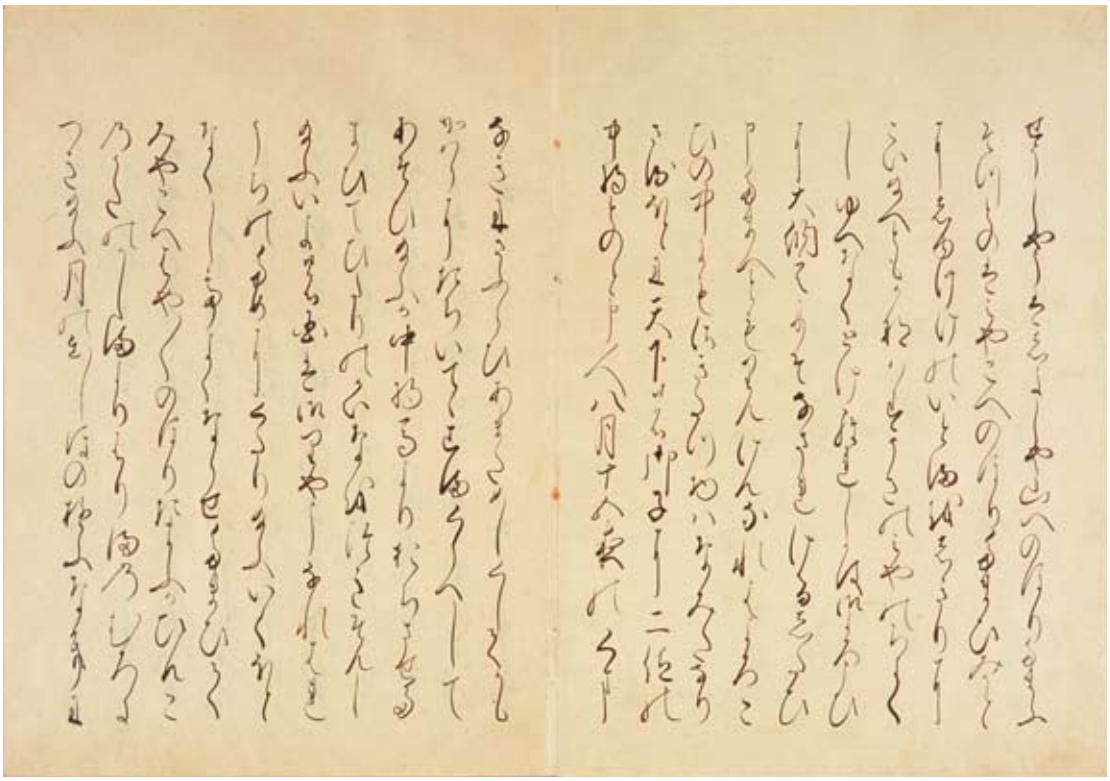


千たひも、たひおもひしかともわれさ
へむなしく成ならはくさ葉のかけに
てひめかおもひおもきかうへのさよ衣
かさねてうきめを三せ川にしつ
みはてんもかなしけれはせめての
こりあとのいとなみし侍らんとかい
なき此身はと、まりぬとの給へは
せうしやうはた、なくよりほかの事
ましまさすそつとのも御けうやうさま
〳〵し給へともせうしやうはいまたあひ

見ぬ御かたゆへにかくとふらはせたまふ
あはれなりし御事ともよそのたもと
もしほりかねたるありさまなりさて
いとまこひしてたちわかれたもふつくし
へ御くたりのときはのほりのときとち
きりしにけふはなれてのその後は
またいつの世にめくりあふへきこ
ひしき人のかたみのいとまたかひに
ぬる、たもとかなおつるなみたもかい
のしつくもわきまへかねたるふせい

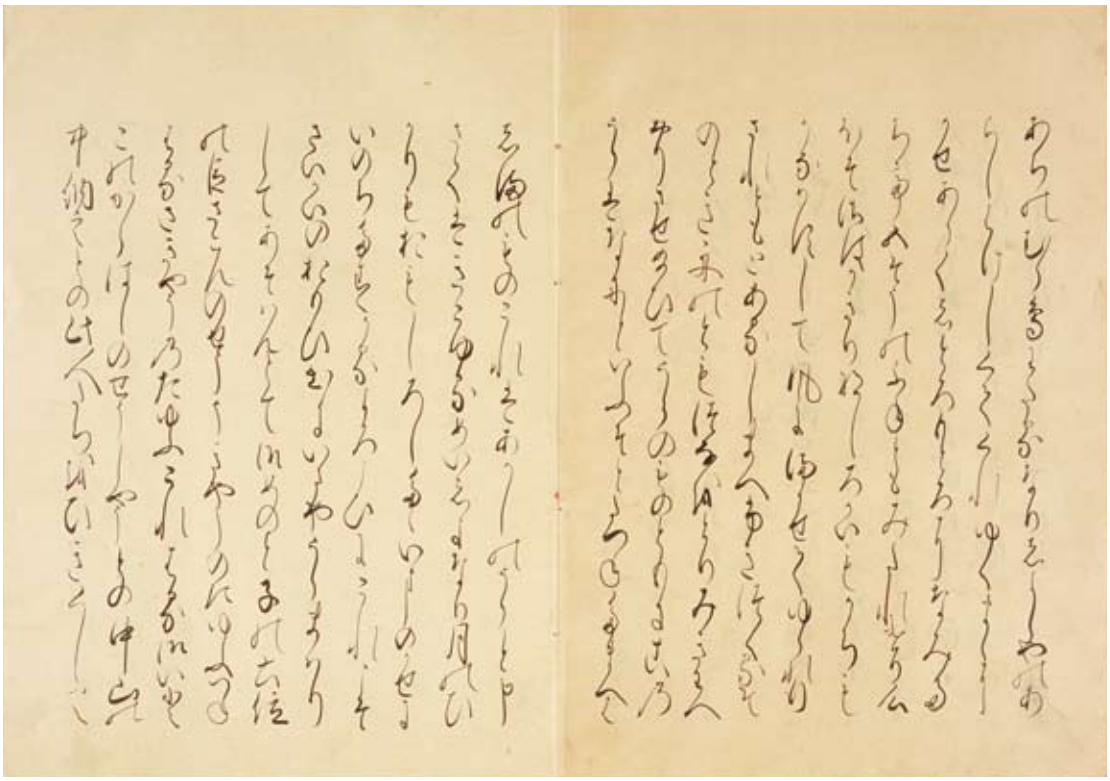
なりいまをかきりとおもへはりんゑし
やうしのみちのふるさとを
此たひなかく
へたてぬる
こゝち
して
うきわかれ
たまひ
けり

▲岩上に置き去りにされた姫のもとに
海人のつり舟が通りかかる

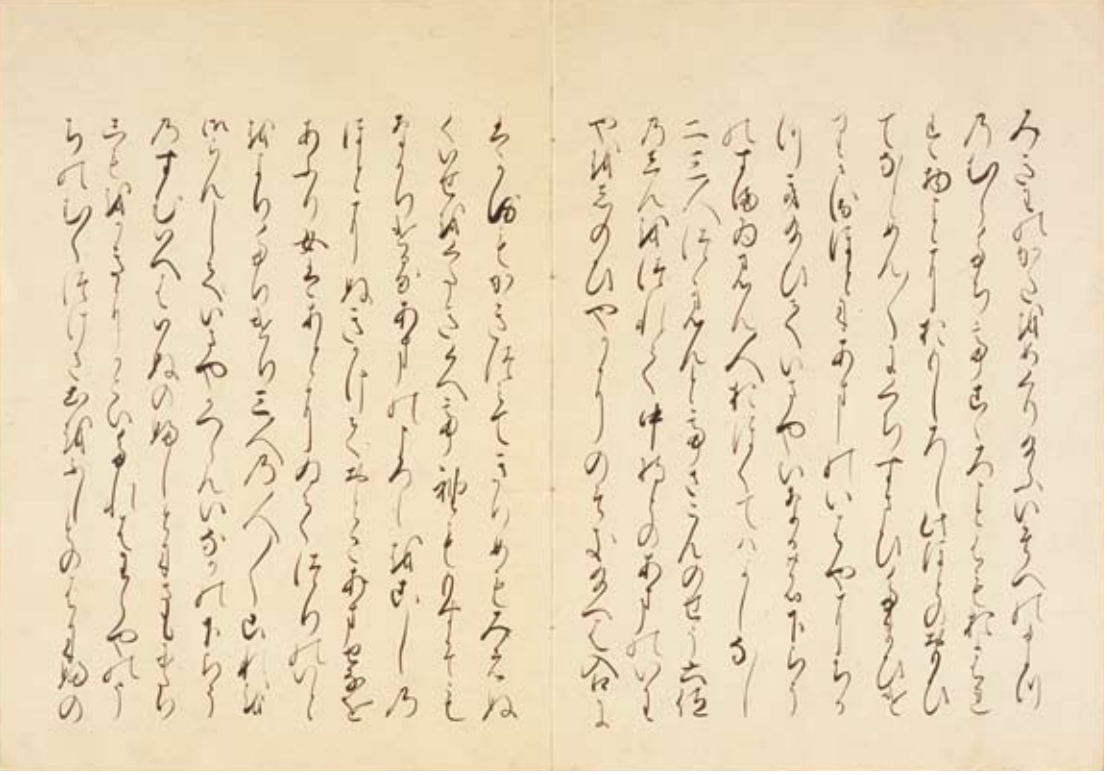


せうしやうはしよしや山へのほりたまふ
そつとのはみやこへのほりたまひみかと
にしゆつけのいとまをしきりに
こい給へともかなはすうさのみやのちよく
しゆへなくとけられしかは御よろこひ
に大納言にそなされけるしたひ
申たまへともりんけんなれはよろこ
ひの中にもさきたつ物はなみたなり
さるほとに天下の御子に二位の
中将とのと申人八月十五夜のくま

なきにさふらひあまためしくしてかも
かはらにたちいて、こまくらへして
あそひ給ふか中将馬よりおちさせた
まひてひたりのかいなをつきそんし
給ふいよの国は御りやうなれはれ
うちのためにくたり給ふいくほと
なくしてよくならせたまひて
みやこへはやくのほりたまふかひんこ
のうたのかしまよりはりまのむろに
つき給ふ月の出しほのゆふなきに

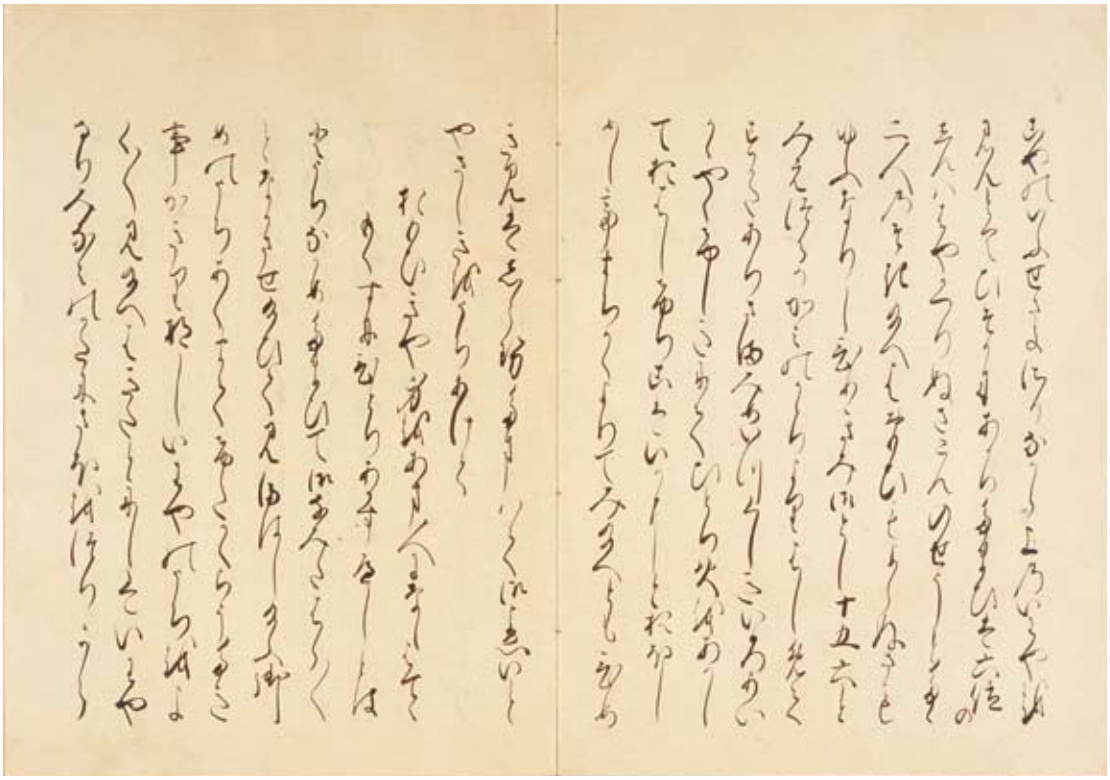


あちのむら鳥わたるなりしよしやのあらしはけしくてくれゆくまゝにかせあらくしとろもとろになみたちて五そうのふねともみたれけり心ほそさはかきりなしろかいもかちもかなはすして風にまかせてゆられ行されともとあるしまへふきつくるそのとき舟のともつなをとりみきわへおりさせ給ひてうらのものともにこのうらはなにといふそとたつねたまへはしまのものこれはあかしのうらと申さてはきこゆるめいしよなり月のひかりもおもしろしたゝいまのかせにいのちたすかるよろこひにこれこそさいかいのおもひ出にいさやうらまはりしてあそはんとて御めのと子の六位の臣さこんのせううきやうのたゆふつねはるさきやうのたゆふこれはる御いとこのからはしのせうしやうとの中山の中納言との此人たちをひきくして

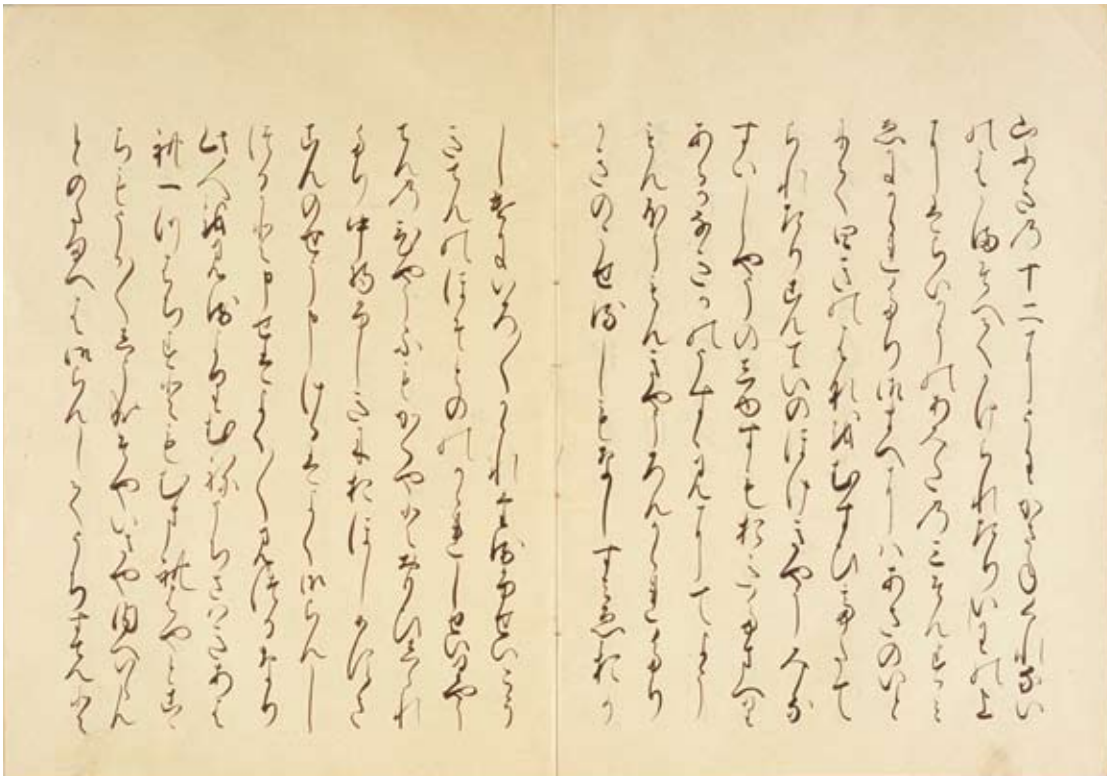


みきわのかたをめくり給ふいそへのまつ
のむらたちてこゝろことはもおよはれ
す物ことにおもしろし此ほとのおもひ
てなとめん〳〵にくちすさひたまひけ
りさるほとにあまのいはやにちか
つき給ひていさやいなかの下らう
のすまゐ見ん人おほくてはよしなし
二三人つゝ見んとてさこんのせう六位
のしんをつれて中将とのあまのいわ
やをしのひやかにのそき給へは入口に

はかまもかきつみてきりめもみえぬ
くいせをくたきくへて袖ももすそも
なかりけるあまのころもをこしの
ほとにぬきかけておとこあませなを
あふり女はあとにゐてつりのいと
をよりたりけり三人の人〳〵これを
御らんしていさやかへらんいなかの下らう
のすむいへはいぬのふしとにさもにたり
こもをかきにかこいたれはわらやのう
ちのむくつけき土をふしとのはにふの

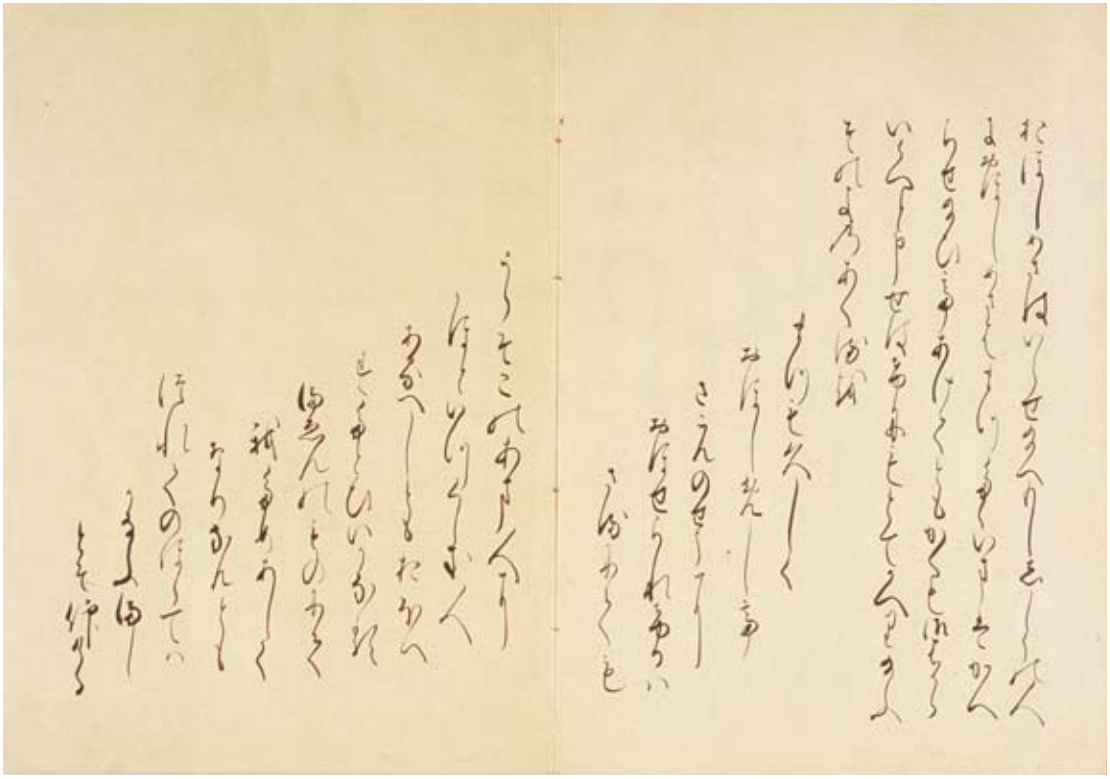


こやのいふせさよさりなから上のいわやを
見んとてひそかにあかりたまひは六位の
しんははやかへりぬさこんのせうとたゝ
二人のそき給へはおもひもよらぬさも
ゆふなりしひめきみ御とし十五六と
みえつるかかみのかゝりよりはしめて
すかたありさまみめいつくしきいろあい
かゝやくけしきにてひとり火をあかし
ておはしけりこはいかにとおほし
めしてまちかくよりてみ給へともひめ
きみはしらせたまはて御こゑいと
やさしきをうちあけて
　おもひきや身をあま人になしはて、
　もくすにひとりあかすへしとは
とうちなかめたまひて御なみたはら〳〵
となかさせ給ひて見まはし給ふ御
めのうちあくまてけたかくらうたき
事かきりなしいわやのうちをよ
く〳〵見給へはきたとにしはいわや
なりみなみのかたにさほをつりうら



山ふきの十二にうわかさねくれない
のはかまそへてかけられたりいわの上
にはらいかうのあみたの三そんすみ
ゑにかゝれたり御まへにはあさのいと
にて四きのはなをむすひてたて
られたりこんていのほけきやうみな
すいしやうのしゆすもおきたまへり
あるかなきかのうすゝみにてよう
もんほうもんきやうろんかゝれたり
かきのこせるしもなしすみゑおか

しけにいろ〳〵かゝれたるふせいこう
きてんのほそとののかゝれしせいりやう
てんのひやうふもかくやとおもひしられ
たり中将ふしきにおほしめすさ
こんのせう申けるはよく御らんし
つるかと申せはよく〳〵見つるなり
此人を見るよりむねうちさはきあは
れ一つはちすともむまれはやとこゝ
ちもうか〳〵しう成そやいさや内へいらん
とのたまへは御らんしてうちすてんと



おほしめさはいらせ給へもししししうの人
におほしめさはまつたゝいまはかへ
らせ給ひてあけてともかくも御はから
い候へと申せはけにもとてかへり給ふ
そのよのあくるを

まつも久しく
おほしめして
さこんのせうに
おほせられけるは
さるにても

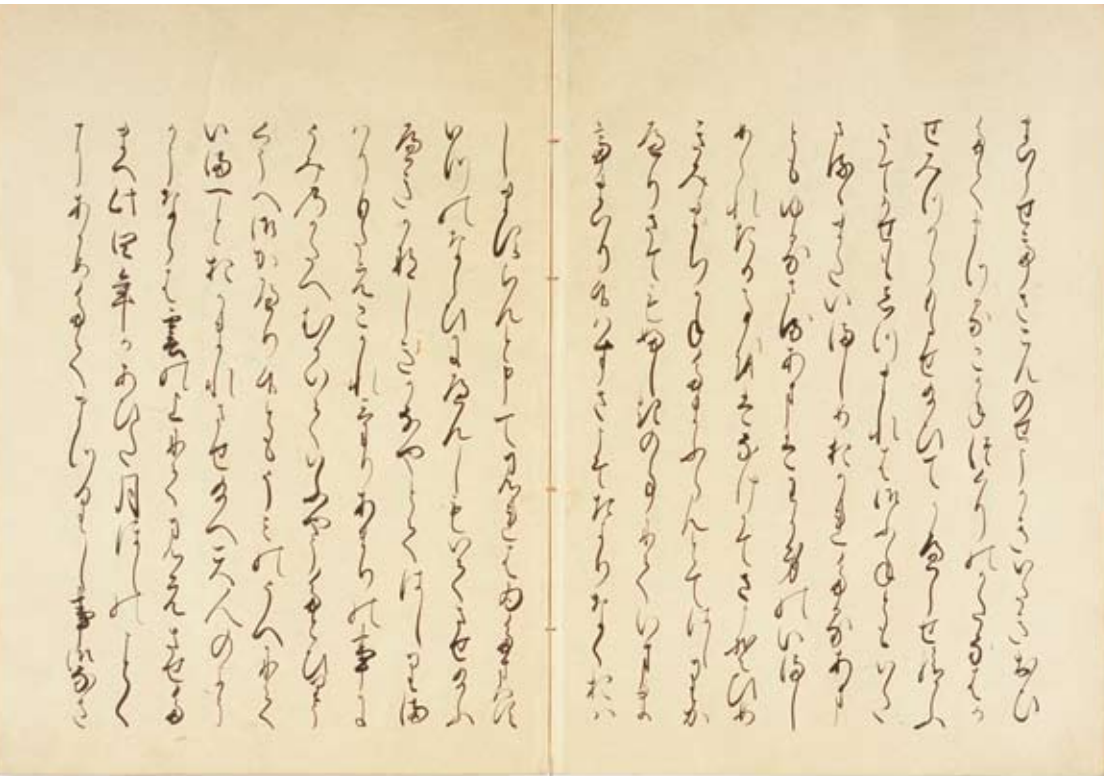
うらそこのあま人に
かほといつくしき人
あるへしともおほへ
すたとひいかなる
まゑんのものにて
我ためあしく
なりなんとも
つれてのほらては
かなふまし
とそ仰ける

▲岩屋に棲む姫をのぞき込む二位の中将

さてほの〳〵とあけければはかのところ
のあま人をめしてかつきせよとのた
まへはきのふの大かせになみしつま
らす候へはかなふましとそ申ける
おほせをそむくはふしきのものとて
みきわのまつにいましめつけて
さてさこんのせうとたゝ二人かのいわや
へ御入ありてさし入見給へはゆふへ御
らんせしは物のかすならすけさはなを
みまさりてゆきのはたへのくまなさは

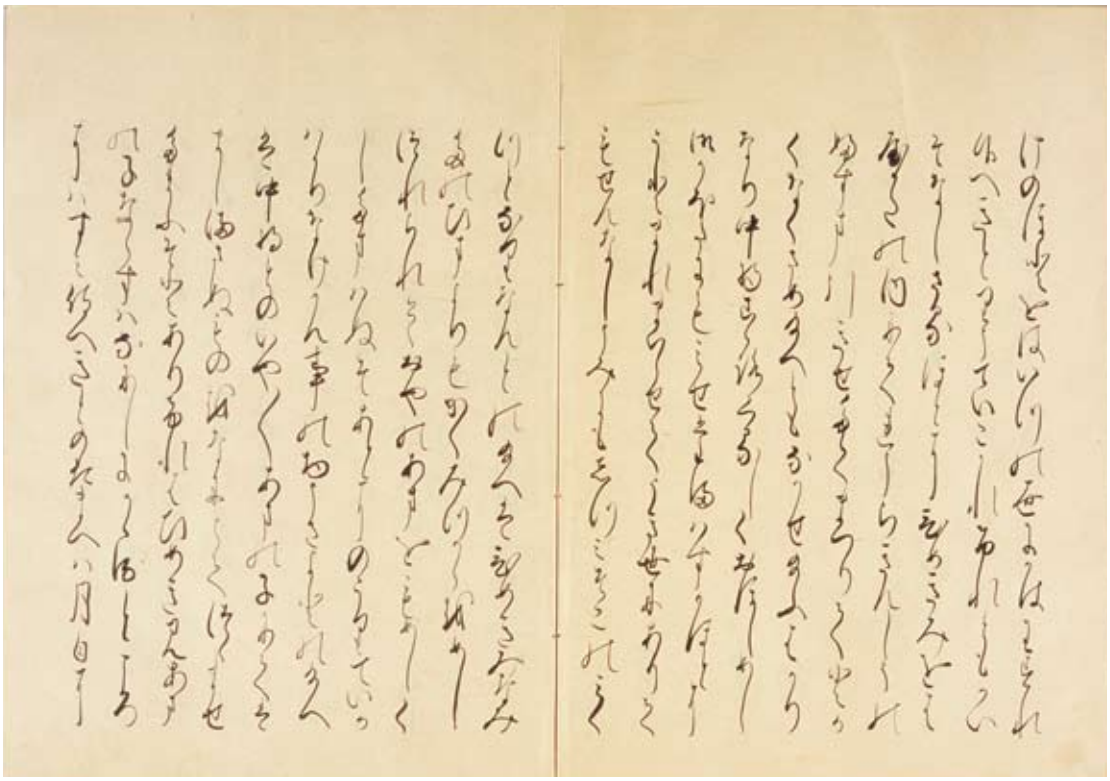
いふへきやうもなかりけりいわやの内に
あまたあるうたの中に
　月はさしなみはよせきてたゝく戸を
　　あるしかほにもあくるしのゝめ
たらちおにいかにしらせんうらにきて
　　ちいろのそこをのかれたる身そ
月かけはあまのいわやにやとれとも
　　なからへはてんことそかなしき
いかにせんうらのあま人なかりせは
　　なみのそこにてくちやはてなん

かくてひめきみきのふけふとはおもへ
ともはや四年まてこそおはしけれ
さて中将とのさしよりてをきさせ給へ
との給へはひめきみうちおとろき
給ひてみ給へはおり物のかりきぬに
かねくろなるにうすけしやうふとまゆ
つくりてあてやかなる人なれはみやこ
の御事きつとおほしめしいたさせ
たまひてゆめかやときぬひきかつき
ふし給ふさほなる御小そてうちかつけ

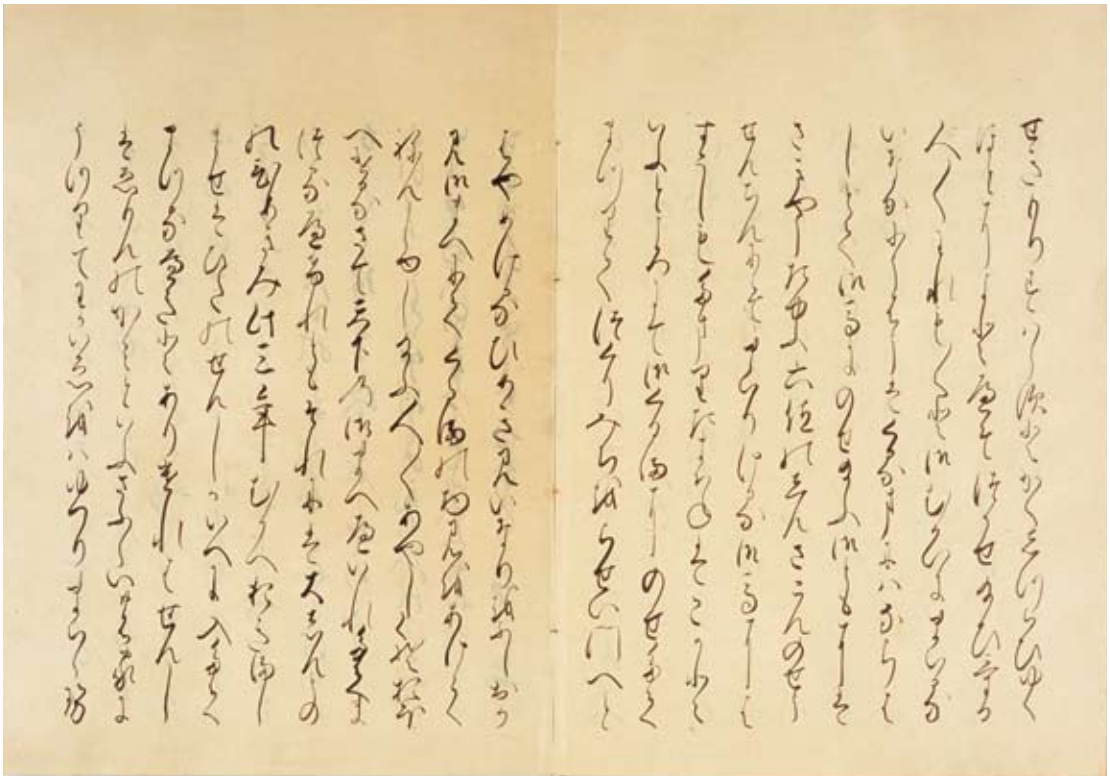


まいらせてさこんのせうかきいたきおひ
たてまつるこかねつくりのかたなはか
せみつからもたせ給ひてかへらせ給ふ
さてかせもしつまれは御ふねともいた
さるゝまたいましめおかれたるあま
ともゆるさるあまはわか身のいまし
められたる事をはなけかてさこそひめ
きみまちかねたまふらんとてはしりか
へりさてもふしきの事にていまま
てまいり候はすさこそたよりなくおは

しますらんと申て見れはゐたまはす
いつのならひにへんしもいてさせ給ふ
へきかなしきかなやとてはしりま
はりもたえこかれけりあまりの事に
うみのかたへむかいていふやうたとひりう
くうへ御かへり候ともうみのうへにて
いま一とおかまれさせ給へ天人のよう
かうならは雲の上にて見えさせた
まへ此四年かあひた月ほしのことく
にあかめたてまつりし事御なさ

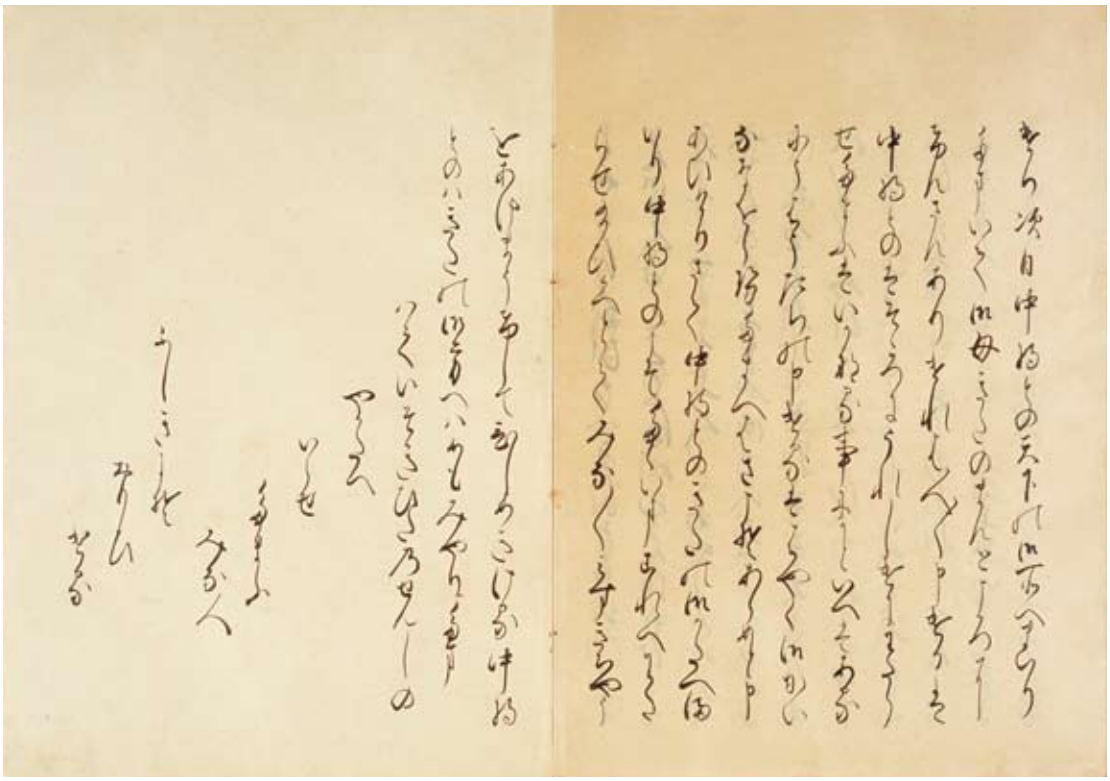


けのほとをはいつの世にかはわすれ
候へきとりうていこかれけれともかい
そなしさるほとにひめきみをは
やかたの内にてれうらきんしうの
ふすま引きせたてまつりてとか
くなくさめ給へともなかせ給ふはかり
なり中将こゝろくるしくおほしめし
御かほたにもみせたまはすかほとに
うとまれまいらせてうき世にありて
もせんなしうみにもしつみそこのみく
つとなりなんとの給へはひめきみなみ
たのひまよりもかくみつからをめし
つれられとくおやのあまをもめしく
したまはぬそあとにのこりていか
はかりなけかん事の物うさよとの給へ
は中将とのいや〳〵あまの子にては
ましまさぬものをなにとてつゝませ
たまふそとありけれはひめきみあま
の子ならすはなにしにかゝるところ
にはすみ侍へきとのたまへは月日に



せきもりすはらすとかくしつらひゆく
ほとによとへそつかせ給ひける
人〳〵われも〳〵と御むかいにまいる
いなかにうはうはくるまにはならは
しとて御馬にのせ給ふ御ともには
さきやうたゆふ六位のしんさこんのせう
せんちんに候てまいりける御馬には
すこしもたまりたまはねはこかと
いふところにて御くるまにのせたて
まつりてつくりみちをらせい門へと

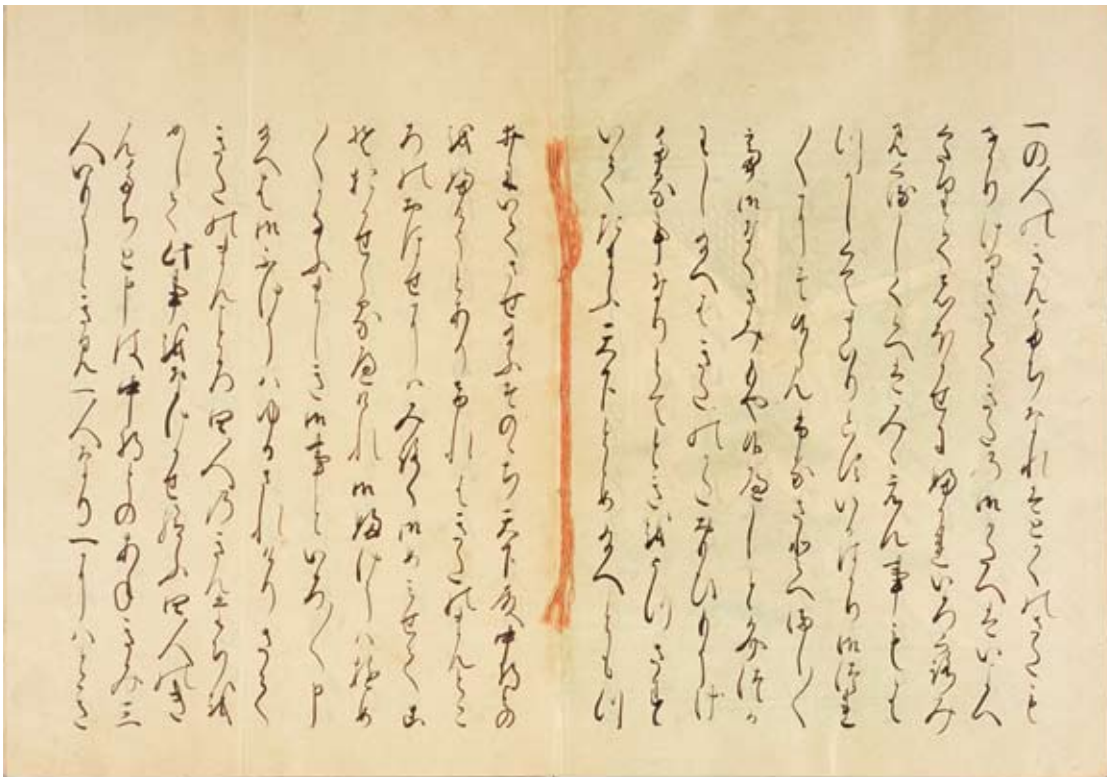
はやめけるひめきみいなりをふしおか
み御まへにてくるまの物見をあけて
ねんしゆし給ふ人〳〵あやしくそおほ
へけるさて天下の御まへへいれたてま
つるへけれともそれには大しんとの
のひめきみ此三年むかへおきまし
ませはひたのせんしかいへに入たて
まつるへきとありけれはせんし
はゑもんのかみといふさふらいの家に
うつりてわかいゑをはゆつりまいらせ



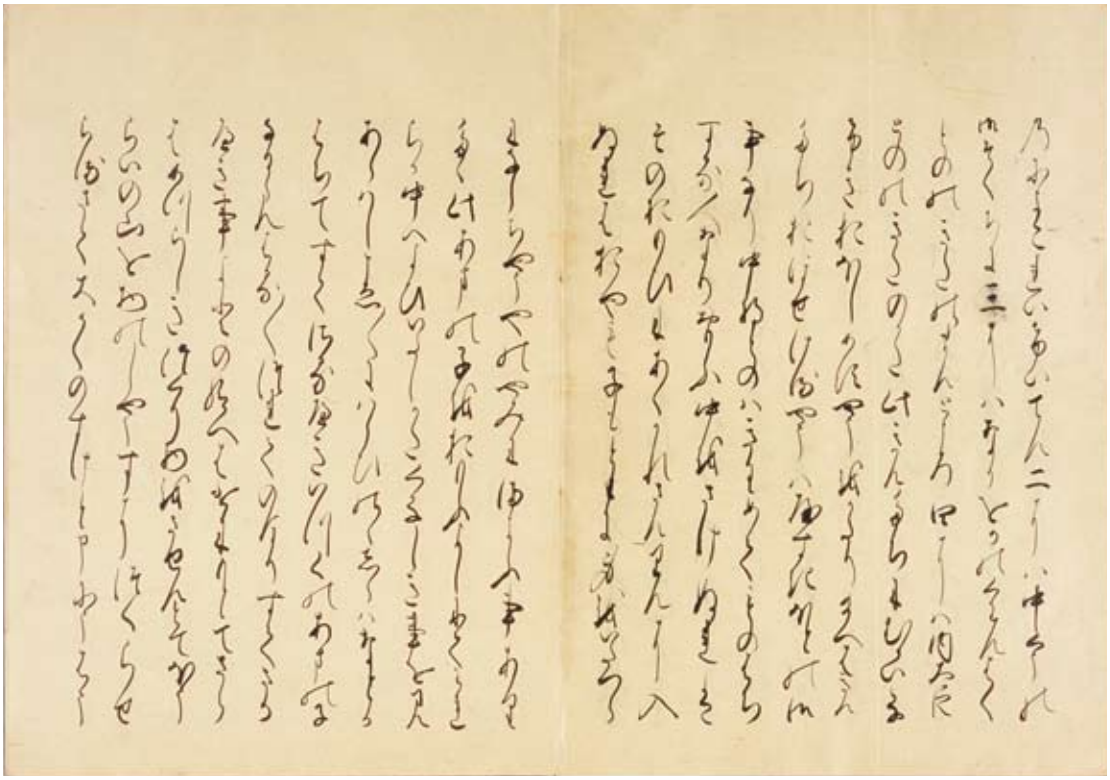
けり次日中将との天下の御前へまいり
たまいて御母きたのまんところに
けんさんありければ人〳〵申けるは
中将とのはそゝろにうれしけにわたら
せたまふはいかなる事にかといへはある
にうはうたちの申けるははやく御かい
ななをらせたまへはさこそあらめと申
あいけりさて中将とのきたの御かたへま
いり中将とのこそたゝいまこれへわた
らせ給ひ候へとてみな〳〵みすきちやう
をあけまうけしてひしめきける中将
とのはきたの御方へはめもみやりたま
はていそきひたのせんしの
やかたへ
いらせ
たまふ
みな人
ふしきにそ
おもひ
ける

▲都に戻り内裏に見参する中将

さるほとにつくの日たいりへまいりた
まひてみかとに御けんさんし給ひて
後ははな見の御かう月見の御くわい
にもいてたまはて天にすまはひよく
のとり地にあらはれんりのえたとなら
んとしやう〳〵世ゝはなれしとこそち
きられけれたかひのこゝろさしなのめ
ならすそふかゝりけるみななみ〳〵の
かんたちめの人ならはあまのむすめくし
たるとてわらひのゝしるへけれとも

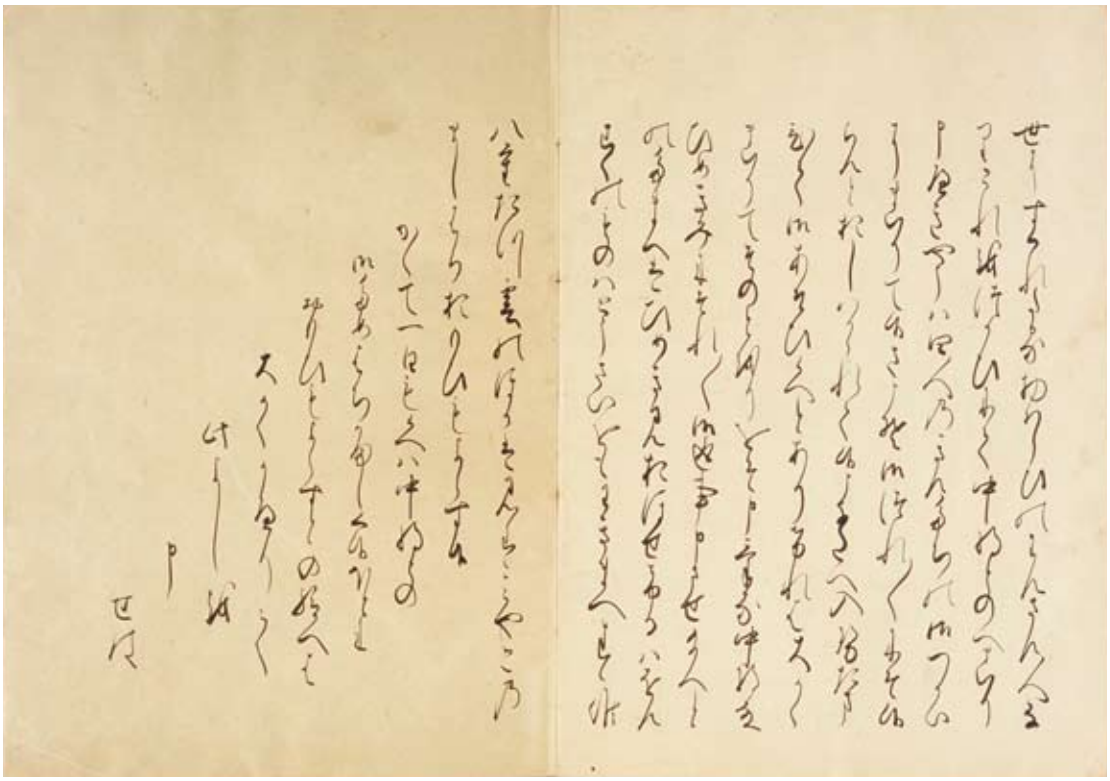


一の人のきんたちなれはとかくのさたも
なかりけりさてきたの御かたへはいよへ
くたりてしほかせにふかれいろくろみ
見くるしく候へはみゝえん事もは
つかしくてまいり候はすいかはかり御つれ
〳〵にそ候らんふるさとへまし〳〵
て御なくさみもや候へしと文つか
わし給へはきたのかたおもひもうけ
たる事なりとてときをうつさす
いてたまふ天下とゝめ給へともつ
ゐにいてさせ給ふそのゝち天下殿中将との
をふけうとありけれはきたのまんとこ
ろのおほせにはみろく御めみせてこ
そおかせらるへけれ御ふけうはゆめ
〳〵かなふましき御事といろ〳〵申
給へは御ふけうはゆるされけりさて
きたのまんこ(ママ)ところ四人のきんたちを
めして此事をなけかせ給ふ四人のき
んたちと申は中将とのあねきみ三
人いもうときみ一人なり一にはとき



のによこれいけいてん二には中くうの
御そくちよ三にはなかをかのくわんはく
とのののきたのまんところ四には内大臣
とのののきたのかた此きんたちにむかいな
けきおほしめすやうをかたり給へはきん
たちおほせけるやうはやすきほとの御
事なり中将とのはきわめてものはち
する人なりおもふ中をさけぬれは
そのおもひにあくかれさんりんに入
ぬれはおやも子もともに身をいたつら

になしちやうやのやみにまよふ事あり
たゝ此あまの子をおもふよしにてわれ
らか中へよひいたしかたくなしき事を見
あらはしこゑ〳〵にはらひのゝしらはなとか
はちてすてさるへきいつくのあまの子
なるらんはる〳〵つれてのほりすてさる
へき事よとの給へはけにもとてさら
はめつらしきつくり物をさせんとてほう
らいの山を物のしやうすにつくらせ
らるさて大かくのすけと申にうはう



世にすくれたる物はらいのわんさん人な
りこれをつかひにて中将とのへまいり
申へきやうは四人のきんたちの御つかい
にまいりて候さこそ御つれ〳〵にそ候
らんとおしはかられて候こなたへ入せたま
ひて御あそひ候へとありけれは大かく
まいりてそのとをりをそ申ける中将殿
ひめきみにそれ〳〵御返事申させ給へと
のたまへはひめきみおほせけるはをん
こくのものはとうさいをもわきまへす候

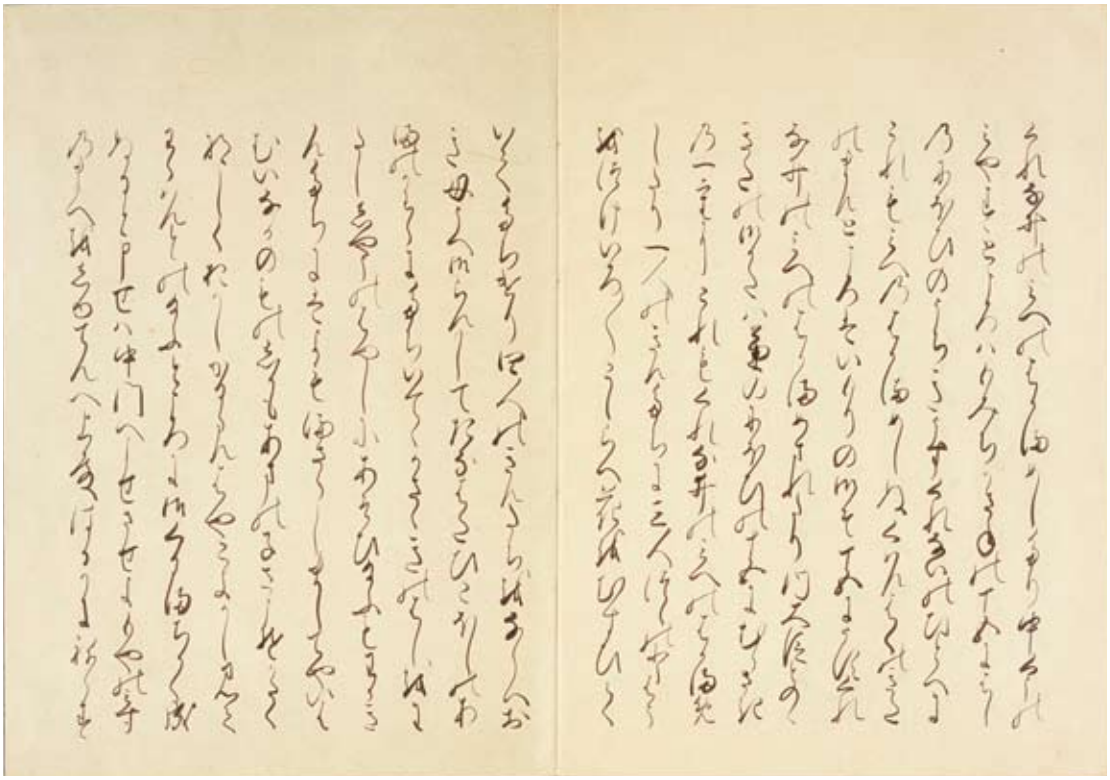
八重たつ雲のほかは見すみやこの
ましはりおもひもよらす候

かくて一日も候へは中将との
御ためはちかましく候ほとに
おもひもよらすとの給へは
大かくかへりて
此よしを
申
せは

▲再度の遣いを出すきんたち

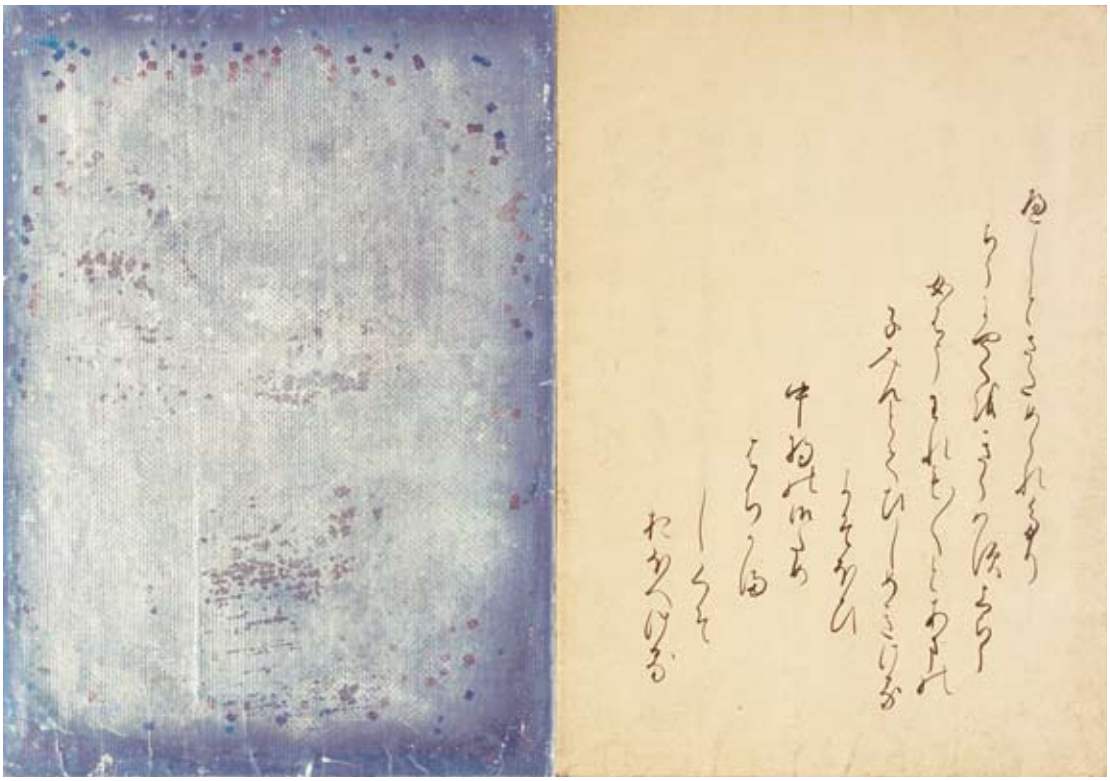
こと葉のつゝきはおもしろしされとも
こゑはなまりておかしかるらんたゝよひ
よせてわらはんとてかさねての御つかひに
はしろきしやうそくにからあやのはかま
そへて御ちの人にもたせまた大かくをつか
はさる四人のきんたちのおほせには御つ
れ〳〵をしはかりまいらせてかやうにたひ
〳〵申になとや御いてましまさぬそ中
将との御ゆるしなきやらんかまいてとく〳〵
わたらせ給へまたきたのまんところのおほ

せにそこれにもわかきにうはうのあまた
さふらへはなにかわくるしかるへきかまひ
て御入まし〳〵てあそはせ給ひ候へとの
おほせにて候と申けれは中将とのまこと
にたひ〳〵おほせくたさるゝ事をそれ入て
候みつからいかてせいすへきはや御返事申
させ給へとありしかはひめきみの給ふは
てんしやうのうてなのすまゐきんかくの御わさ
かりそめにもみゝにふるゝ事なけれははゝ
かりまいらせ候へとも千引のいしをうこかし
てと申させ給へとありしかは大かくかへり
て此よしを申四人のきんたち千引のい
しとはいかなる事やらんとのたまへはまん
ところのたまひけるは千引の石をうこかして
とは千人して引ともうこくましき石なれ
ともおほせのおもさにゆるきいつるといふ
事なりさてはこしとおもふかやいさやま
ふけせんとてこゝをはれといてたち給ふ
れいけいてんはをみなへしの十五にもえ
きにほひのうちきくれなゐのひとへに

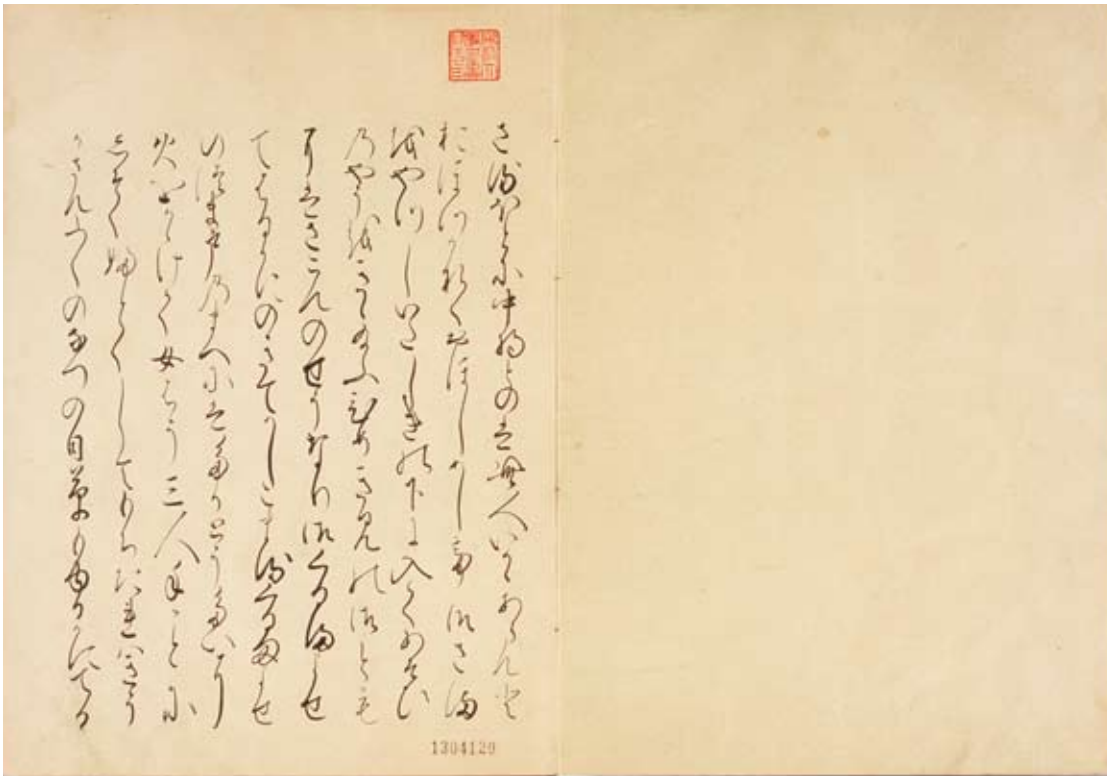


くれなゐのみへのはかまめしたり中くうの
みやすところはもみちかさねの十五にはし
のにほひのうちきうすくれないのひとへに
これもみへのはかまめしぬくはんはくのきた
のまんところはいもりの御そ十五にうすくれ
なゐのみへのはかまめされたり内大臣とのゝ
きたの御かたは菊のにほひの十五にむらさき
の一重にこれもくれなゐの三へのはかまめ
したり一人のきんたちに三人つゝのにうはう
をつけいろ〳〵こしらへ花をむすひて

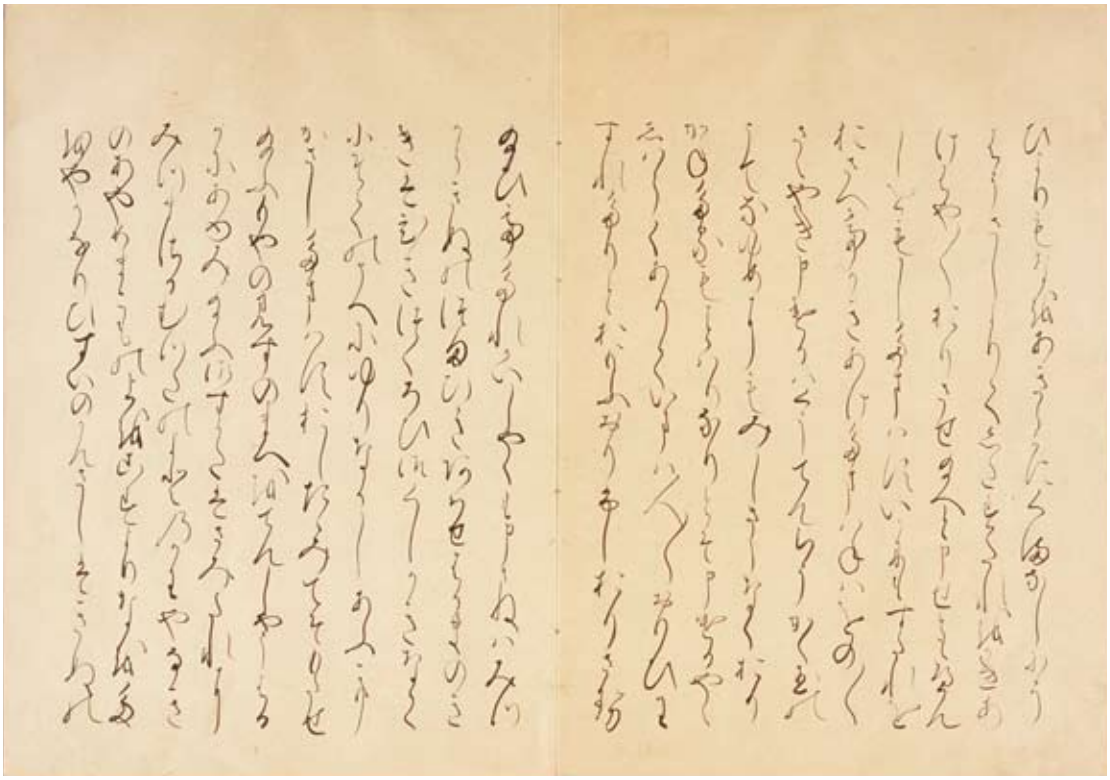
いてたちけり四人のきんたちをならへお
き母うへ御らんしてたなはたひこほしのあ
まのかわらにたちいてゝかさゝきのはしをわ
たししやうのはやしにあそひ給ふもわかき
んたちにはよもまさらしましてやいは
むいなかのものしかもあまの子さこそかたく
なしくおかしかるらんはやこよかし見て
わらはんとの給ふところに御くるまちかく成
ぬると申せは中門へよせさせよもやのみす
のまへをしゆてんへ上殿はるかにねらす



へしとさためられたり
らうにやくをきらはす上らう
女はうわれも〳〵とあまの
子みんとてひしめきける
よそほひ
中将の御ため
はちかま
しくそ
おほへける

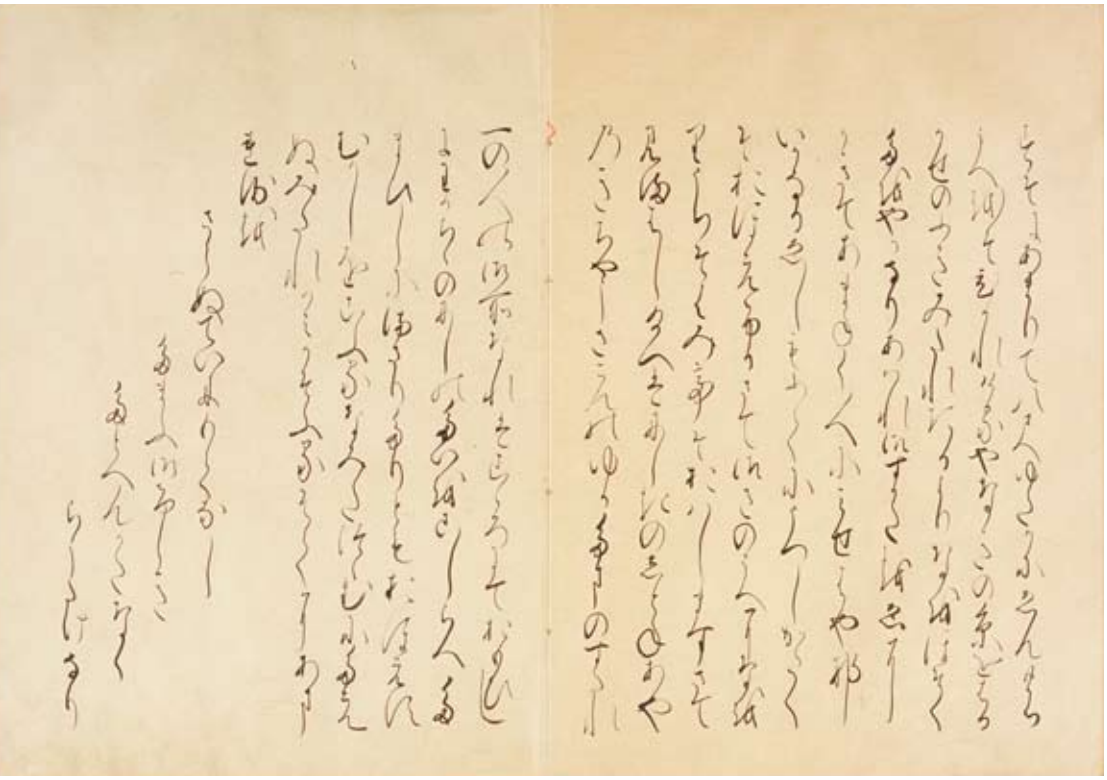


さるほとに中将とのは此人いかゝあらんと
おほつかなくおほしめして御さま
をやつしいたしきの下に入てあそひ
のやうをきゝ給ふひめきみの御とも
にはさこんのせうなり御くるまよせ
てはるかにのきてかしこまるくるまよせ
のつま戸のまへにはたかとうたいに
火をかゝけて女はう三人手ことに
しそくふとくしてもちたれはきう
かさんふくのなつの日草もゆるかすてる



ひよりもなおあきらかにくまなしにう
はうさしよりてしたすたれをかきあ
けはや〳〵おりさせ給へと申せともへん
しをもしたまはすいかにもすたれを
おさへてかきあけたまはねはをの〳〵
さゝやき申けるはくうてんらうかく玉の
うてなゆめにもみしさうなくおり
かねたるもことはりなりとそ申けるやゝ
しはらくありていまは人〳〵おもひわ
すれたりとおもふおりふしおりさせ

給ひてたれかいしやくも申さねはみつ
からきぬのつまひきあはせはかまのき
きはひきつくろひ御くしかきなて
小そてのうへにゆりなかしあふき
かさしたまはすおしたゝみてそもたせ
給ふもやのみすのまへをてんしやうはる
かにあゆみ給ふ御すかたはさみたれに
みつまさるむつたのよとのかわやなき
のあやめまこもの上をこすよりなをた
をやかなりひすいのかんさしはきぬの



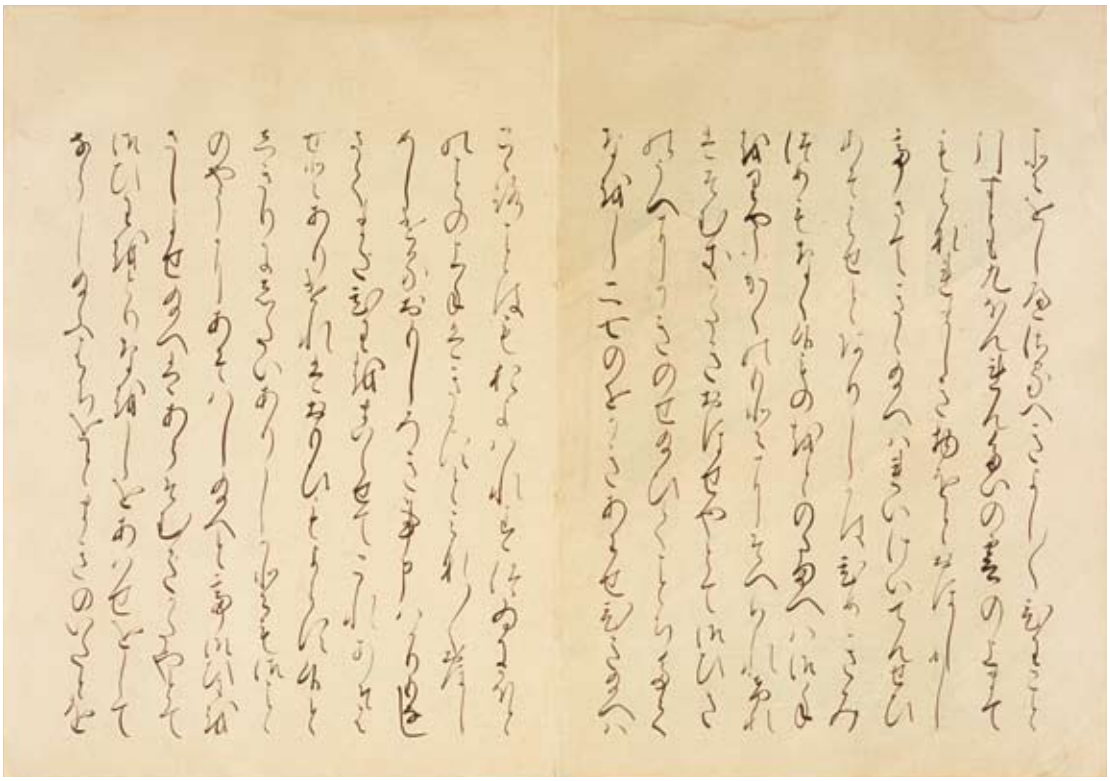
すそにあまりて八尺ゆたかにゑんの
うへをそひかれけるやなきの糸をはる
かせのふきみたれたるよりなをほそく
たをやかなりあはれ御すかたをゑに
かきてあまねく人にみせはやな
いかなるゑしもふてにうつしかたく
そおほえけりさて御さのうへになを
りうちそはみてそおはしますさて
見みまはし給へはにしきのしとねあや
のきちやうさこんのゆかたまのすたれ

一の人の御前なれはこゝろにておもひし
にわかちゝのにしのたいをこしらへた
まひしにまさりたりともおほえす
むかしをこふるなみたつゝむにたえ
ぬみたれかみかそふるそてにあま
れるを

さらぬていにもてなし
たまふ御けしき
たとへんかたなく
らうたけなり

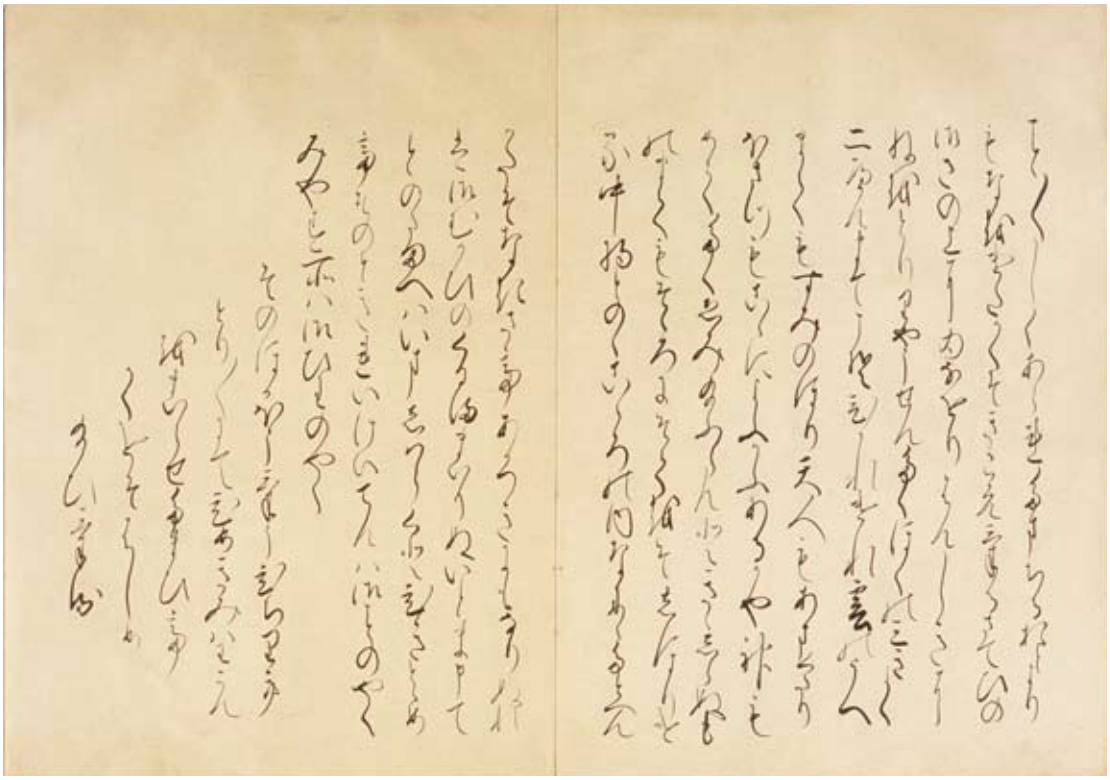
▲姫を迎える北の政所

きんするこゑよりもなをおもしろき
御こはねなりそのときれいけいてん
ことをとりいたしちとあそはし給へ
とありけれはひめきみのたまふは
いそにしくるゝまつのかせおきのかもめ
のともよふこゑよりほかはきゝならは
ぬ身にて候へはかやうのことゝやらんは
おもひもよらぬ事との給へは中将殿
いたしきの下にてきこしめしかほと
の事とかねてしりなはなとかひわ



ことをしへさるへきよし〳〵ひわこと
引すとも九ほんれんたいの雲の上まて
もはなれましき物をとおほしめし
てさてきゝ給へはれいけいてんせひ
あそはせとありしかはひめきみ
つめもなく候ものをとのたまへは御手
をりやうかくのもとにそへられけれ
はそむきかたきおほせやとて御ひさ
のうへにかきのせ給ひてことちたて
なをし二七のをかきあわせひき給へは

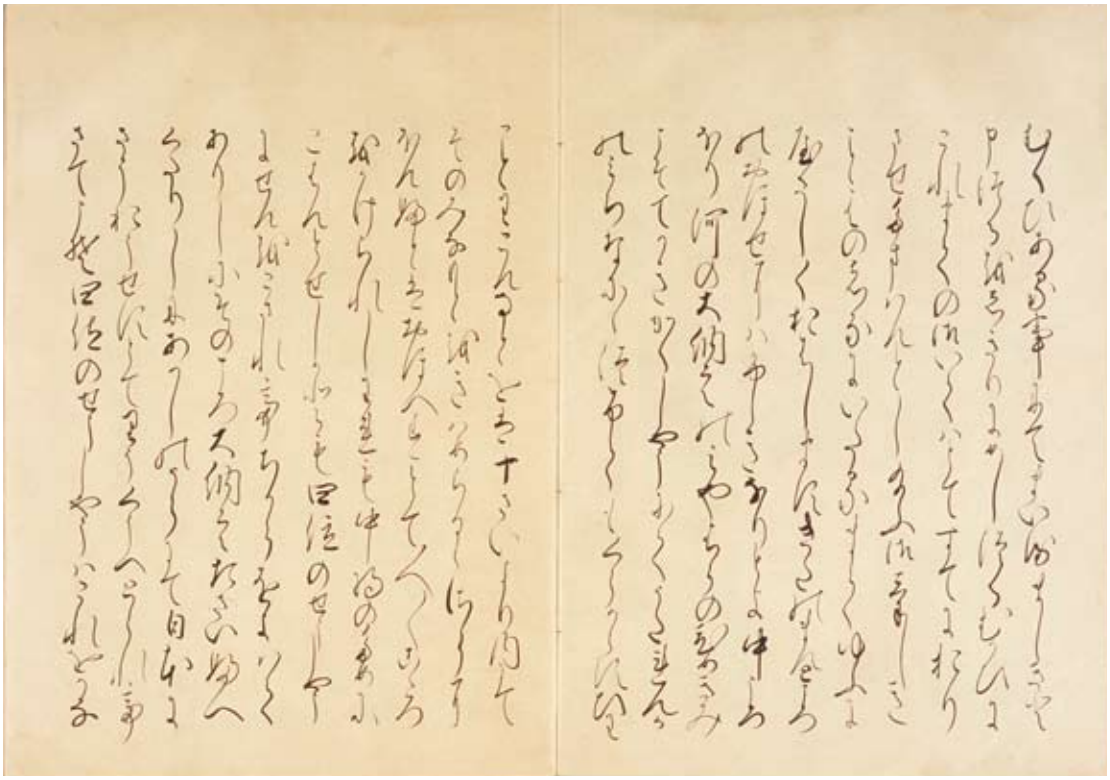
こゝろことはもおよはれすつゐにかほと
のことの上手はきかすとみな〳〵おほし
めしけるおもしろき事申はかりもなし
さてまたひわをまいらせてこれあそは
せとありけれはおもひもよらす候と
しきりにしたいありしかとも御こと
のやうにあそはし給へとて御ひわを
さしよせ給へはあらそむきかたやとて
御ひわをとりなおしをあはせをして
ならし給ふはちをとまきのいたとを



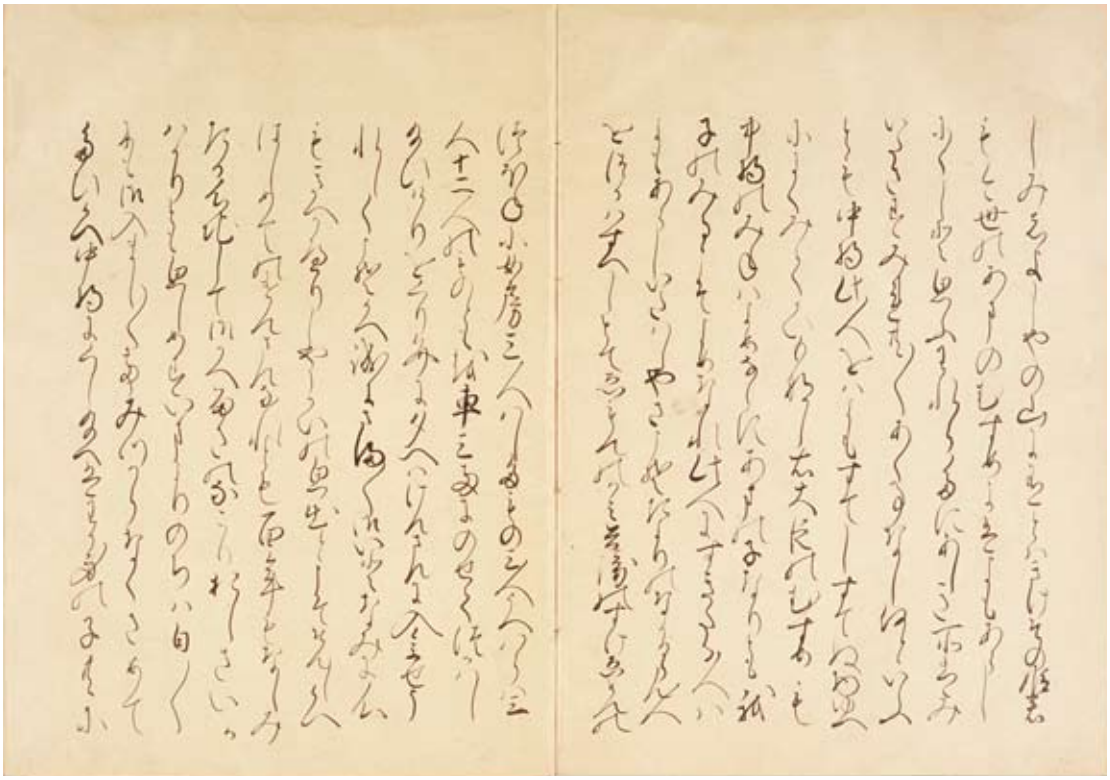
こと〳〵しくあられたまちるおとより
もなをけたかくそきこえけるさてひの
御さの上にゐなをりはんしきに
ねをとりりやうせんたくほくの三きよく
二へんまてこそひかれけれ雲のうへ
まてもすみのほり天人もあまくたり
ほさつもこゝによふかふあるかや神も
めてたくゑみ給ふらんときゝしらぬも
のまてもそゝろにそてをそしほりけ
る中将とのゝこゝろの内なにゝたとへん
かたそなきさてあかつきにもなりぬれ
は御むかひのくるままいりぬいとま申て
との給へはいましはらくとひきとゝめ
てそのときれいけいてんは御ことのやく
みやす所は御ひわのやく
そのほかほうけうひちりき
とり〳〵にてひめきみはわこん
をまいらせたまひて
かくをそはしめ
給ひける

▲和琴をひく姫

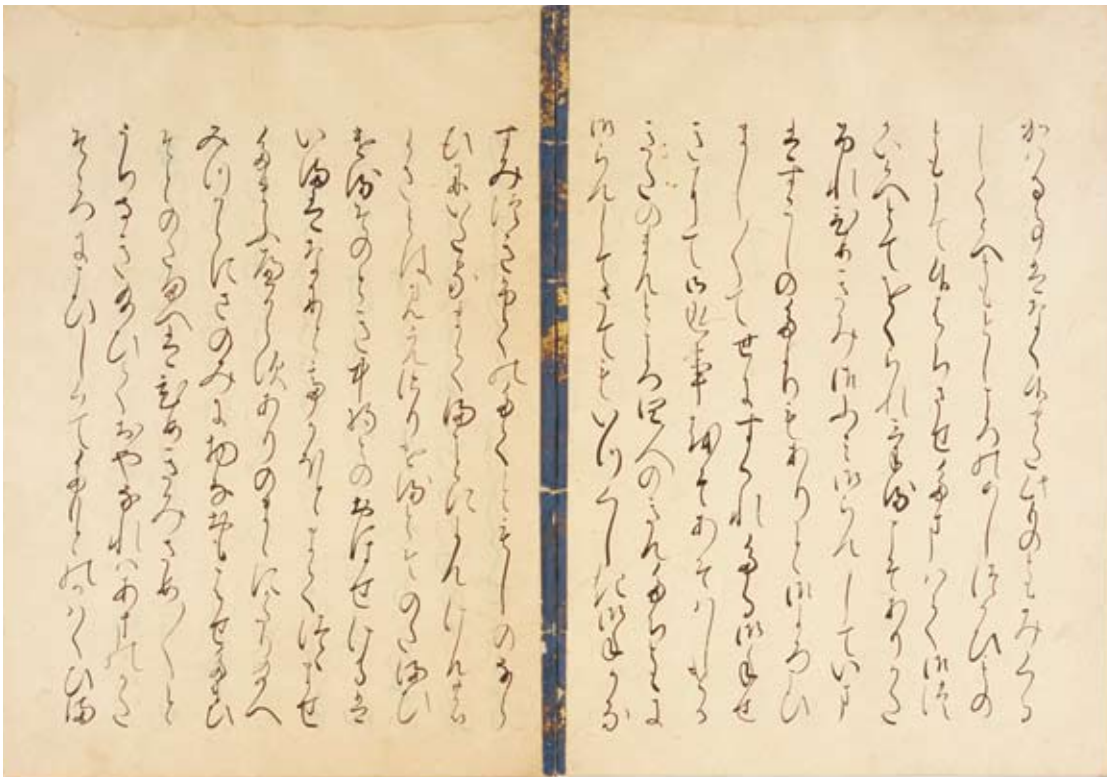
まことにこくらくしやうとにて廿五の
ほさつたちのあそはすかくもかくやと
おもひしられたり夜もほの〳〵とあけ
けれは御いとまこいまし〳〵て御くるま
にそめし給ふ人〳〵御なこりをし
さに御くるまよせまていて給ひこれ
まてまいりて候とのたまふさためてを
それ入て候との給はんとおもひしに
さはのたまはて御くるまのしたすたれを
あけてなに事もせんあく二つのならい



むくひある事にてまいるましきと
申つるをしきりにめしつるむかひに
これまての御いてはとてすてにおり
させたまはんとし給ふ御けしき
ことはのしなにいたるまてゆふに
やさしくおはしますきたのまんところ
のおほせにはふしきなりとよ中ころ
ほり河の大納言のみやはらのひめきみ
こそてかきかくしやうにてうたれんか
のみちなにゝつけてもくらからすひわ
ことわこんなとをは十さいより内にて
そのみなもとをきはめらるゝさらに
ほんふとはおほへすとて人〳〵こゝろ
をかけられしわれも中将のために
こはんとせしかとも四位のせうしやう
にせんをこされてちからをよはて
ありしにそのころ大納言たさいふへ
くたりしにあかしのうらにて日本に
さうおうせすとてりうくうへとられて
さてこそ四位のせうしやうはこれをかな

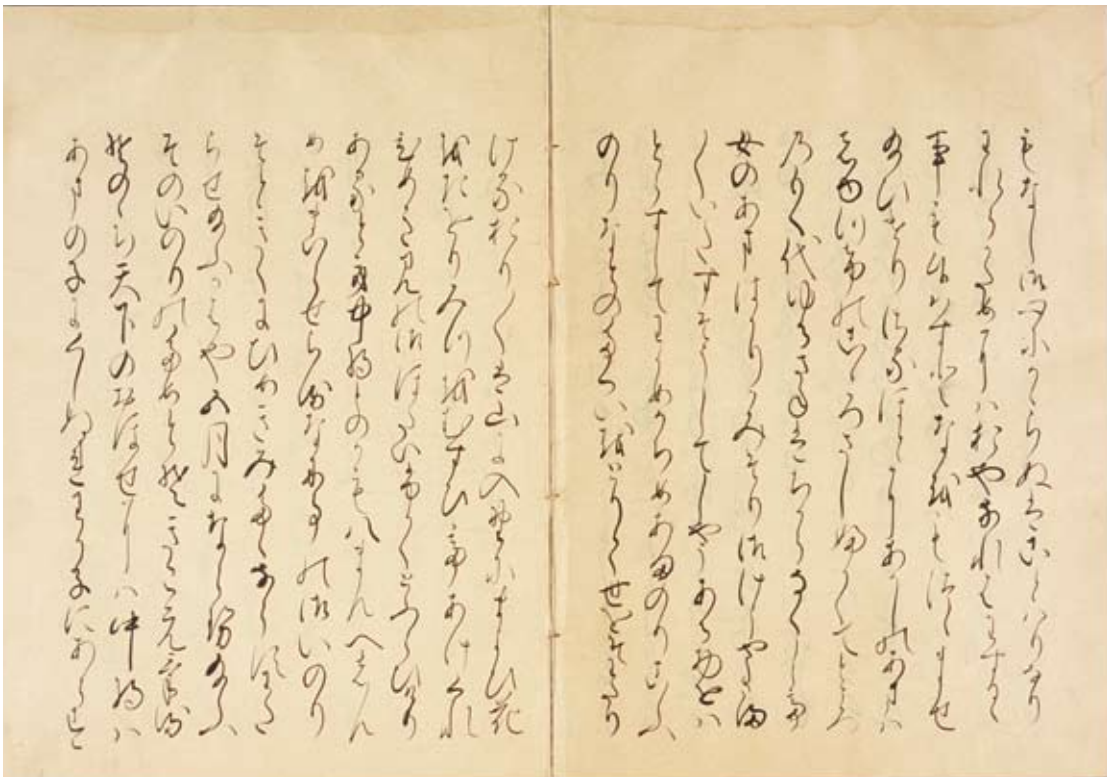


しみしよしやの山に有とはきけその姫君
も今世のあまのむすめにはよもあらし
にくしと思ふわれらたにあしき所はみ
いたさすみれ共〳〵あく事なし何といふ
とも中将此人をはよもすてしすてぬ物ゆへ
ににくみてかいもなし右大臣のむすめも
中将のみ手はよめならすあまの子なりとも我
子のみるこそよめなれ此人にすきたる人は
よもあらしいたはしやさこそたよりのなかるらん人
をつかはすへしとてゑもんのかみ兵衛のすけゑもんの
つほねに女房三人はしたもの三人うえはらは三
人十二人のものともを車三両にのせてつかはし
給ひけりをくり文に夕へはけんさんに入参せう
れしくこそ候へ誠にさま〳〵御いとなみに心
もきへかへりしやうかいの思出とこそそんし候へ
はしめてのけんさんなれとも百年もなしみ
たる心地して御かへるさのなこりおしさいか
はかりとも思しめすいまよりのちは日〳〵
にも御入まし〳〵てみつからなくさめて
たひ候へ中将にくし給へはわか身の子共に



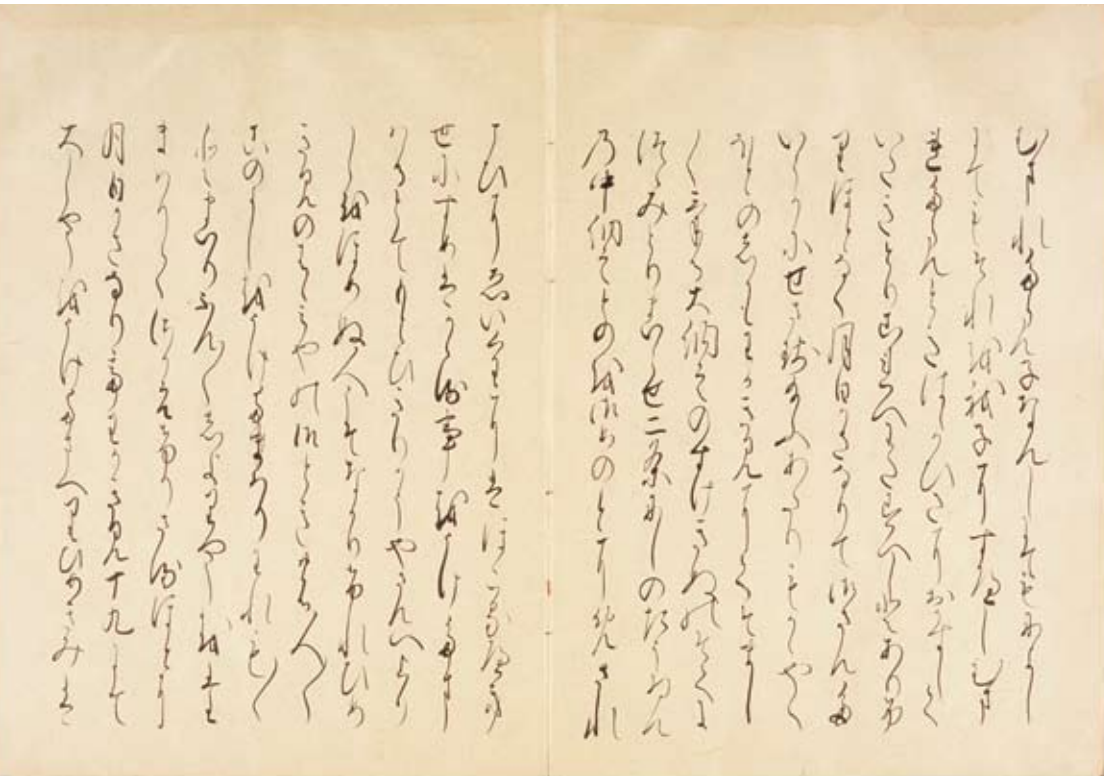
かはる事はなく候また此ものともみくる
しく候へともとしころのめしつかひもの
ともにて候はちさせたまはて御つ
かい候へとてをくられけるこそありかた
けれひめきみ御ふみ御らんしていま
はすこしのたよりもありと御よろこひ
まし〳〵て世にすくれたる御手せ
きにて御返事をそあそはしける
きたのまんところ四人のきんたちともに
御らんしてさてもいつくしき御手かな

すみつきふてのたてともしのなら
ひにいたるまてまことににんけんの
わさとは見えさりけるとそのたまひ
けるそのとき中将とのおほせけるは
いまはなにとてかほとまてつゝませ
たまふへからすありのまゝにかたり給へ
みつからにさのみに物なおもはせたまひ
そとのたまへはひめきみさめ〳〵と
うちなき給ひておやなれはあまのかた
そゝろにこひしくてたもとのかはくひま



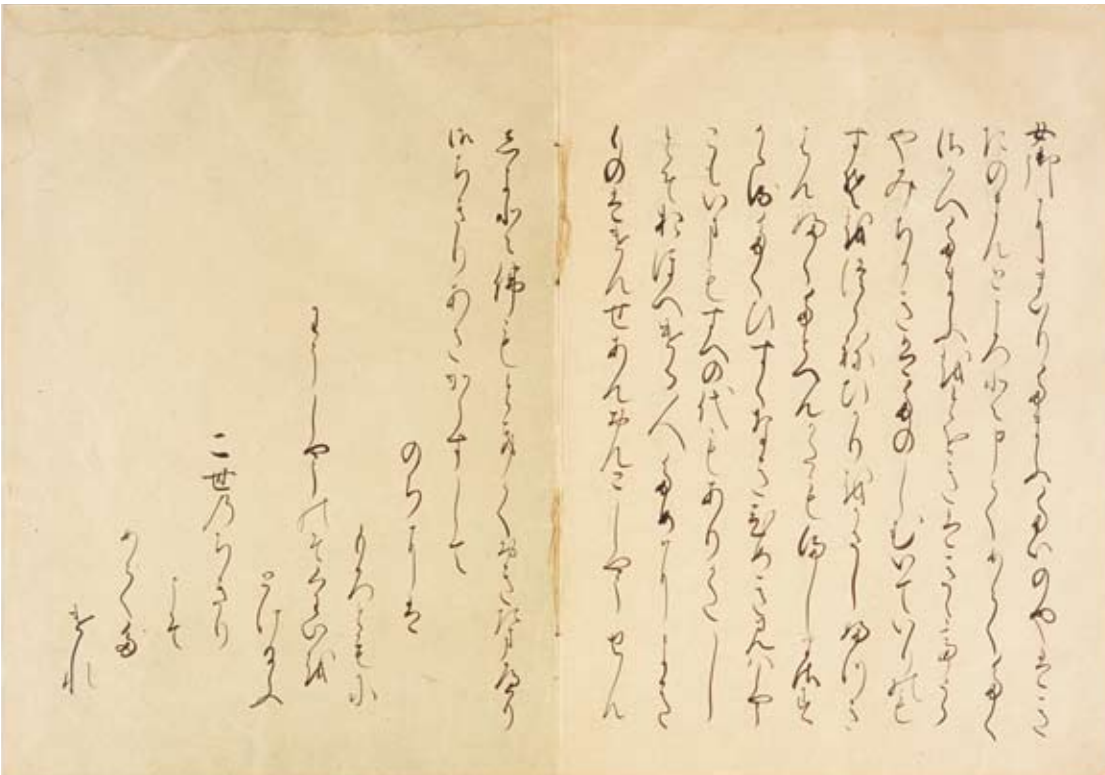
もなし御心にかゝらぬはことはりなり
われらかためにはおやなれはわするゝ
事も候はすとなをもつゝませ
給ひけりさるほとにあかしのあまは
しゆつけのこゝろさしふかくてところ
のもく代ゆるさねはちからなくして
女のあまはかりかみそり御けうやうさま
〳〵いたすそうしてしやうある物をは
とらすしてわかめかちめあまのりこふ
のりなとのたくいをとりて世をそわたり

けるおり〳〵は山に入野にまよひ花
をたをりみつをむすひてあけくれ
ひめきみの御ほたいふかくとふらひけり
あるとき中将とのかも八まんへしん
めをまいらせらるなに事の御いのり
そときくにひめきみたゝならすわた
らせ給ふかはや五月にならせ給ふ
そのいのりのためとそきこえける
そのゝち天下のおほせには中将は
あまの子にくしぬれわか子にあらす



むまれたらん子なんしにてもによし
にてもそれを我子にすへしむま
れたらんときは、かひさにおかすして
いたきとりこれへわたすへしとありけ
りほとなく月日かさなりて御さんた
いらかにせさせ給ふあたりもか、やく
ほとのしかもわかきみにてそまし
〳〵ける大納言のすけきぬのそてに
つ、みとりまいらせ二条にしのたうゐん
の中納言とのを御めのとにめされ

こひにゑいくわにはほこるへき
世にすめはか、る事をうけたま
はるとてもとひきりかうやさんへ上り
しをほめぬ人こそなかりけれひめ
きみのは、みやの御ときの人〳〵
このよしをうけたまはりわれも〳〵
とまいりふん〳〵しよりやうをた
まはりてさかえけりさるほとに
月日かさなりてわかきみ十九にて
大しやうをうけたまへりひめきみは



女御にまいりたまふたいのやはき
たのまんところと申てめてたく
さかへたまふをとをきはきゝてうら
やみちかきはたのしむいていりのも
すそをつらねひかりをかさしふつき
はんふくたとへんかたもましまさす
かゝるたくひすくなきひめきみはしやう
こもいまもすへの代もありかたし
とそおほへける人ためによき
ものはけんせあんおんこしやうせん

しよと佛もときておきたまへり
御ちきりあさからすして

のちには
もろともに
わうしやうのそくわいを
とけ給ふ

二世のちきり
こそ
めてた
けれ

ISSN 0388-6700

JOSHO

BUKKYO UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

佛教大学

〈後記〉

本年度は徳森前図書課長に替わり、藤堂祐亨図書課長を迎えました。利用者サービスの充実、蔵書やデータベースの拡充等に取り組んでまいりました竹村専門員は、本年度をもって停年退職いたします。

漢籍、佛書のデータ入力も本格的にはじめました。佛教大学図書館 OPAC にも多くの漢籍、佛書の書名が登場していることと思います。また、データベース目録の言語表記も徐々に多言語化が進展しており、本学図書館においても、チベット文字などでの入力にも取り組んでおります。漢字やアルファベットはもとより、キリル文字、アラビア文字、ハングルなど図書目録の世界も国際色豊かになってまいりました。

常 照 ― 佛教大学図書館報　第58号

平成21年3月1日　発行

編集・発行　佛教大学図書館

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96

TEL 075(491)2141　FAX 075(493)9042

印　　刷　株式会社 図書印刷 同朋舎

〒600-8805 京都市下京区中堂寺鍵田町2

http://www.bukkyo-u.ac.jp/lib/